

# 川木の雅正

麻生路郎☆主筆



二月號

友

No. 393 Pensoj flugas trans la land-limon  
THE SENRYU ZASSHI

3月本社句会

兼題  
「兼題」  
同浮雑  
情名魚  
黒

川柳雑誌社主催

# 本社二月句会

最近新人の進出めざましいものがあります。  
柳界のためにいい傾向だと思えます。  
新人を誘って一人でも多く参加しましょう。

日時 二月七日(日)午後六時  
場所 大阪観光ホテル ⑤三五〇八番  
市電道頓堀電停東へすぐ

兼題 「弱味」(三句) 麻生路郎選

路郎選の入選発表は三月句会の会場でいたします。  
⑤切後の投票は無効となります。(句集の裏へ投票記入)

「空気」(三句) 須崎豆秋選  
「新婚」(三句) 西いわを選  
「無駄」(三句) 後藤梅志選

席題 三題(当日発表)

北川 春 巢

呈賞 ☆各題天位 ☆「弱味」天位に不朽洞賞

会費 百円

幹事 紫香・淡舟・いさむ・舟遊・潮花・文秋・庸佑・

狂二・与呂志・白水・木堂・月都・薫風子・永新・  
十四郎・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(〆切二月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

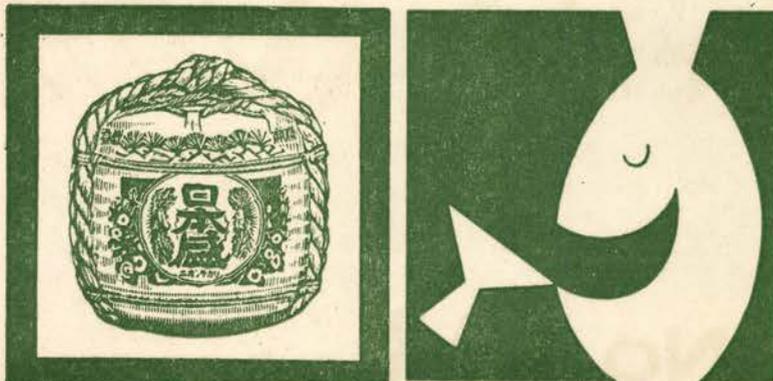
電・住吉 〇六〇八一

# 日本盛酒坊

灘の清酒

和やかに まず一杯

東京酒坊・八重洲口名店街  
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰



二ホンサカリ

# 不朽洞句帖

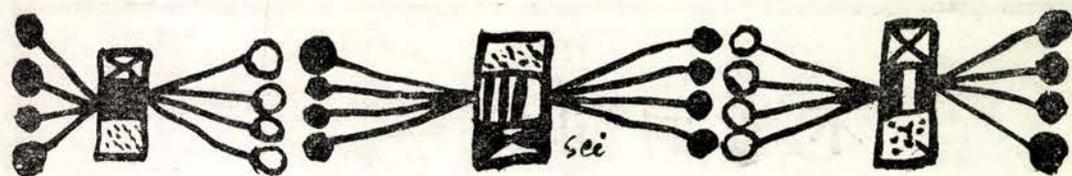
麻生路郎



小さな反抗か映画へ行って留守  
 貧乏だけとおちつきだけは失わず  
 けむりけむりお前の行くところへわしもゆこ  
 第二の天性か女はマツチ摺る  
 テープレコーダーママの声だけ甲ン走り  
 金持は兄なんですと学者で居  
 社長の父は自家用車をさらい  
 ベル鳴って犬が答えただけの家  
 時計が一つ鳴った役目を果たすよう  
 魚釣りに行きましたのと案じてす  
 共産党大地を蹴って戻って来  
 かみなり族飛んで灯に入る虫のごと  
 時計の如く古び下駄の如くちびたり

## 川柳雑誌二月号目次

不朽洞句帖	麻生路郎	(3)
日車翁終焉の地を訪ねて	戸田古方	(12)
かちまけ	戸田古方	(28)
川柳名句と難句	麻生路郎	(10)
宴会部会員	岩崎愛二	(34)
当節三題ばなし	東野大八	(30)
句評座談会	白柳・蔭風子	(16)
寄れば川柳の話	清生・晃・菅風	(16)
川柳「年となり」	北川春巢	(14)
吾輩はねずみである	静馬・舟遊	(31)
絵と川柳で表現する歴史	戸田古方	(32)
先生の「周辺雑感」から	紅原綺史朗	(20)
川柳夫婦善哉	丸尾潮花	(26)
★不朽洞会の人々	丸尾潮花	(35)
★新春川柳大会	丸尾潮花	(35)
川柳特別課題「学生」と決定	丸尾潮花	(32)
川柳塔	麻生路郎	(4)
同舟近詠	諸家	(9)
近作柳檣	麻生路郎	(20)
金泥集	北川春巢	(35)
各地柳壇	麻生路郎	(40)
柳界展望	麻生路郎	(39)
★不朽洞会から	麻生路郎	(39)
一路集	小西無鬼	(36)
「無紙」	小西無鬼	(36)
「変力」	津田麦太	(37)
「化」	小浜牧人	(46)
ペンの散歩	小浜牧人	(46)
路郎の散歩	小浜牧人	(46)



豊中市 戸田古方

もうかる話だと尻たたかれるのもうれし

美しいだけでみられる齢になり

西宮市 若本多久志

十二月八日そうだったそうだった

老いぬるかも二二次会へ誘われず

忘年会すんだら禁酒へふみ切らん

温泉だスキーだストーブやかましい

大阪市 正本水客

まあうどんでもと暫らく待たしとき

留守番の猫背が昼を寒くする

移り気な子のクレオンを揃えとく

大阪市 丸尾潮花

妻の座を守ろうとしてさからわず

箸紙の筆つきつけて縫いつづけ

年玉の子に起された寝正月

兵庫県 小西無鬼

老眼鏡女房ぼちぼち借りに来る

アクセサリにしてはくたびれてるパセリ

人の居ぬところよりも用を足し

ポーナスが今日出たらしい払い振り

大阪市 西 いわを

好かれてる方はうかつに誦うなり

仏壇は見向かれもせずサンルーム

雑沓の中は二人ッ切りのもの

大阪市 武部香林

流転ひしひし質流れ品売場

行年八十朗らかにとおとむらい

総白痴化よそに本屋は本を刷り

ホノルル市 築山快夢起

鉢巻をしなけりヤストにならんのか

老朽車買手がつけば惜しくなり

キラツェア山の大噴火

休暇までとって出掛けりゃ噴火やみ

ホノルル 白砂旋風

年の暮親のやりくり子も真似し

アメリカは金だけだよと馬鹿にされ

大阪市 須崎豆秋

健康異変 四句

降参をしてほろにがい葉のむ

しんみりと歳ですなァと漏らすのみ

酒やめた河童が丘で欠伸する

子の歳にちなみ一から出直そう

ホノルル 羽佐間柳葉

貯めてから左を右の党に変え

剃らぬ日が三日も続く定年期

劣勢遺伝親より上に出たがらす

堺市 吉田圭井堂

名門の角帽だけはきせたがり

値上りへ今更うらむ農地法

人ごとで人生欄の面白く

山口県 国弘半休

合掌をさせれば童心眼を閉じる

無駄足を承知で男のずうずうし

防府市 長野井蛙

先生の腰でタオルがストを待ち

狼を街へ戻した保釈金

ペンの暴力法にも触れず殺人し

大阪市 太田良子

台風で瓦がとんだまんま冬

勉強の他なら賞をもらうて来

岡山県 直原七面山

六十の恋を拍手で迎えられ

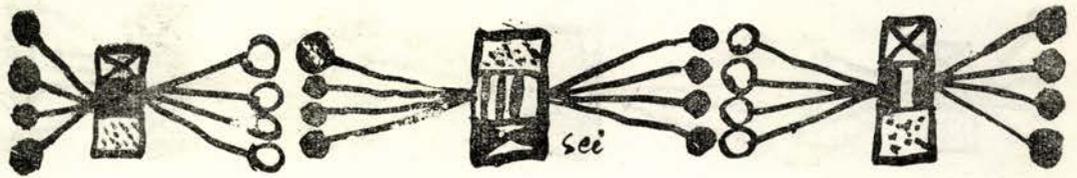
男遊びにあいたか娘見合いをし

揃って嘘を云うから胃がんだと判り

なにくそと思えど胃がいれんには勝てず

撲り合うとこを待てるカメラの非情

人妻になっても漫画本を読む



鳥取市 河村 日満  
父ちゃんの小遣い不思議にも続き

スタンドにして読みきったにあんちゃん

山の遭難続きに

天国へまでの登山でなかりしに

大阪市 安岡 珊枝郎

七〇でやっと存在認められ

焼芋の馳走至上の客もあり

倉敷市 木村 千容

十二月恩給局の親心

清音亭窓の景観絵にしたく

おべっかを顔面のままうける老い

加賀市 野村 味平

モーニング脱げば茶漬がほしくなり

酒きげんこれもって行けあれもやろ

ホルモンでろれつ廻らぬおけさ節

亡き友の名刺もあわれ正八位

大阪市 木村 水堂

年末の新歳時記にデモとスト

金持が案外ケチなたすけあい

頼もしい夫に見える十二月

不朽洞にて

信念に生きる老師の意気にふれ

高槻市 福田 丁路

ゴルフでは社長に教えを乞われる身

人間の粕の頭をはって食い

大阪市 真鍋 一瓢

泥棒ばかりの世に見え夫人老けて行く

持ちつ持たれつおこんにやくよ唐辛子

大阪市 後藤 梅志

六十にしてコツコツと蓄める主義

凡くらのねがいあし跡残すだけ

米子市 小西 雄々

機嫌よく飲めと末席いたわられ

マスコミに追いかけられるいい男

大阪市 山川 阿茶

うらぶれてだらりの帯の頃おもい

ソプラノの口八丁はひずめいて

大阪市 金井 文秋

有卦に入り全集二三申し込み

すぐ金はいらぬとテレビ付きまとい

幼稚園で泣いてた事をまだ云われ

職記物読んで昔は強かった

加賀市 那谷 光郎

俺の顔床屋無断でねじ曲げる

鼻紙について出て来た花名刺

独断で婚約したのと母あきれ

師走風浪費の罪をなすり合い

大阪市 北川 春巢

板敷きの心斎橋も歩るいとき

才あらば書き残したい過去を持ち

産むだけが親ではないとひとのこと

書斎から口笛宿題出来たらし

岡山市 浜田 久米雄

靴墨でよこれそれからかんが立ち

寒月に行く口笛のすきとおり

昇給をしたのに赤字まだ消えず

岡山市 逸見 灯竿

焼芋で足りるお客は裏から来

出雲市 尼 緑之助

一日一善どころか我が身のことばかり

斗争の悲劇マスコミあふるなり

どの道を選ぶか曲り角多く

女子高五十年の老校長

五十年女ひとすじの顔のつや

鳥取市 杉谷 湖山

がらくたを集めて趣味と言う暮し

転宅の番地がついてない通知

京都市 大鶴 喜由

好きと好きつつみかくしが要ろうぞえ

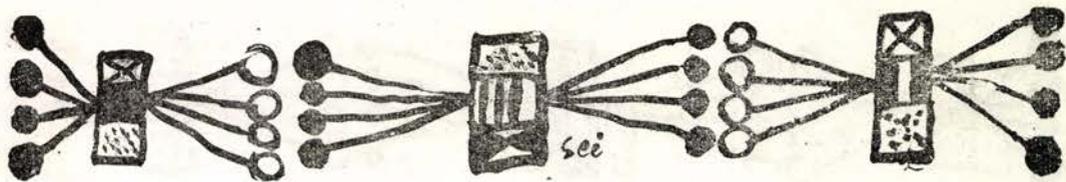
妻の笑顔そわ満足かあきらめか

松すぎて寒さはつのるせぜは無し

責任を持つよと蕩児しらばくれ

台風禍よせて

爪跡はまだいえ切らず初日の出



岡山市 服部 十九平

神様へすがるだけでけがまだ残り

ハンサムが手にした婦人週刊誌

熊本市 有働 菜春

庶民にはかわりもなき月の裏

アルバイト用心棒とは知らぬ母

除夜の鐘脈をとる手と取られる手

大阪市 山本 葉光

壺は孤独つめたい浮世知っている

一つずつ慾がなくなり死が近い

親切な他人に頼り病つづく

岡山市 田村 藤波

宿料を値切って冷めたい蒲団に寝

歳末を尼悠々と経を読む

岡山市 岡田 夜潮

取り附にあって喫殻山のように

吠える犬制して手紙投げ去った

愛してるからこそ荷物持たすのよ

見島市 本田 恵二朗

首の無い仏像でよし奈良時代のもの

嫁ぐ娘に六段も一度所望する

飯縫へ父の猫背のふと淋し

鳥取市 森本 法泉子

血圧を無視してただの酒を飲み

十二月お布施を包む忙しき

岡山市 津田 麦太楼

八十九の母に別れのまくら飯

子沢山あんな高さへ柿を干し

豆炭の火に老らくの手をあぶり

堺市 高崎 雄声

女皆不良に見える明治の眼

人間のぶざま笑って豪雨止み

年の市素通りすればけつまずき

宿直で酒飲み直す大晦日

岡山市 永松 東岸

好景気事務所の裏のビール瓶

十二月ふらふら歩く人も増え

倉敷市 野田 素身郎

明日は日曜ねと子供守りさす気

泣き止まず乳房を男持つとらず

恋捨てて安阻止するデモに入り

大阪市 伊達 堰子

何やらを探して鼠の子をつかみ

破れ瓦庫裏にひと山文化財

大阪市 不二田 一三夫

時計を止めしばし音のない夜を楽しむ

不逞のやから今や労働貴族たり

国会殴り込み

全学連インテリやくざという怒号

兵庫県 酒井 ひか平

寮の風呂フライ級なら未だ入れ

巡査ふとのれんを覗くくせがあり

さようなら亥年

あつと云う間に猪が通りすぎ

神戸市 丸川 初甫

成駒屋大阪弁で又泣かし

割勘と云えば悪友気に入らず

ひいてから踏切ベルの鳴り止まず

岡山市 池田 古心

寝不足を五十五年は生きて来し

大阪府 早川 清生

あいつまで売り出したのか上京し

貧苦から身を立て画伯保守びいき

政見と別に知事賞貰つとく

大阪市 武部 若菜

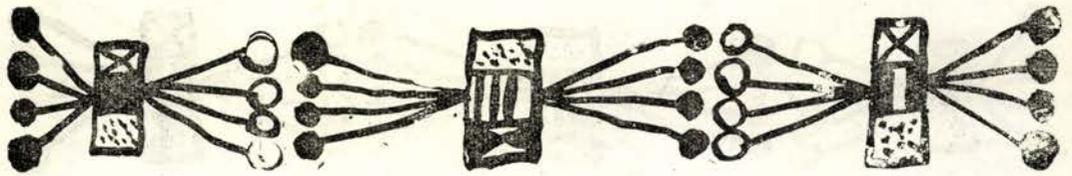
火事の様な焚火市場の大晦日

妻の役果した通夜のほがらかに

老妻の勝気ズラリとお寺様

待たすだけ待たし無い物とって見な

堺市 辻 圭水



万才が岸さんなどとなれなれし

大みそか月給取りは麻雀し

人待たす事にもなれて出世をし

口八丁ハイと一言云いにくく

大阪市 児島与呂志

金五億思いも寄らぬ値とはせず

気ぜわしい奴やと一人でバタバタし

岡山県 野々口美舟

へそのおを切った時からふしあわせ

共稼ぎ妻の意見とくい違い

すり切れた靴が出かける共稼ぎ

西宮市 小浜 牧人

真に受けて十年先の土地を買い

まだかいなオホホフフと赤電話

十二月憚り乍ら借りはなし

豊中市 菱田 満秋

金払う役でついでく百貨店

悩み多く女は洒落を解さない

兵庫県 前川 左文字

十五年の歳月労使で対面し

ボーナスがテレビになって寝正月

大阪市 橋高 薫風子

トンネルを出た思いなるお元日

初日の出舞台に幕が開くごとく

初対面心を飾るのも淋し

炬燵から片手だけ出し飲んで

下関市 中村 九呂平

すこうしは悴気もせいと夫婦もめ

気に喰わぬ奴に吠えないのを叱り

兵庫県 岡 沢 凡志

借金が済んで希望の年を待ち

出雲旅行

大山の雪を異国の様に見る

大阪市 西川 晃

香煙るる手ぶらで昇天し

政治屋に悼まれている博徒の死

人生劇場まずしい演技つづけましょう

貧民窟神様の誤植でした

釜ヶ崎風景

ぶた箱が空いていたから放り込まれ

鳥取県 田中 蛙眠子

唇が欲し星空が凍ろうと

コップ酒じっときいてた枯すすき

まだ山を恋うてきれいなデスマスク

神戸市 仲 どんたく

書棚から角瓶手品の様に出し

パパを寝かしつけてきちゃっと駄べりに来

神原温泉にて

万病にきく温泉で風邪をひき

平田市 久家代仕男

用談をテレビ見ながら済ませて来

十二月らしい活気の団地族

大阪市 本多 柳志

男なんか無視してガムをかみつづけ

芦屋にも質屋があつた裏通り

出雲市 原 独仙

大晦日キャッチボールをするゆとり

初詣感謝する人頼む人

大阪市 大谷 月都

女生徒の色気を教師もて余し

千客万米便所を拡張し

心での浮気は枚挙にいとまなし

獣のような姿で起きて来る

岡山市 江国 幽谷

泣き顔になって男の気をさぐり

孫がいて主人をまだまだ愛しとり

岡山市 光 好陽子

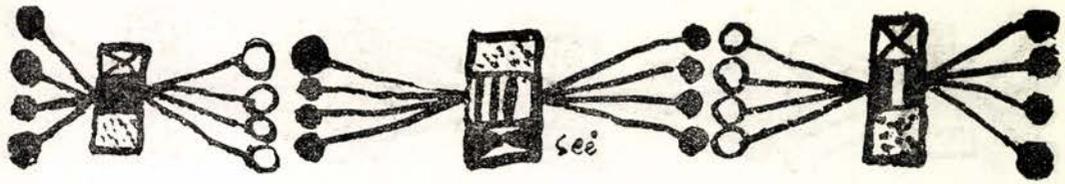
飴玉をばりばりぱりと短気者

右と云えば左とさからう妻になり

西宮市 野呂 鶴汀

街路樹へ誰かの落し物を掛け

口あらば老木古事を語りたし



西宮市 樋口 舟遊

我が影の疲れを知るも十二月  
一葉が好きで晦日の世帯ずれ

新潟県 高野 むじな

上役に腹立てて見せる社交術  
反対ばかりして名を売る気らし  
編物講習無駄話するために行き

高砂市 吉原 紅月

名残惜しむ声を録音とつて去に  
天主閣雲を呑込む様に立ち

洛北大原にて

紅葉して寂光院も稼ぎ時

大阪市 欄 蘭

忠実に動いて呉れるは時計だけ  
今日も亦女ニコヨン落葉掃き

大阪市 石倉 旅風

バスの中でも落ちつかぬ十二月  
児ができてスパルタ式はもう言わず  
愚痴こぼす人に儀礼の口あわす  
傘持たず出れば予報が合うて降り  
一年の速さをかこつ歳となり

大阪市 魚住 満潮

続西成界わい

千円を通天閣の灯にすかし

文無しで又西成へ舞戻り

箱すしをバクチで勝った金で買い  
お前も達者でなあと夫婦別れなり  
ピストルへ子供は派手に手を挙る

一寸したショック嫁はん寝奪られる

刑務所を出てからずつと風邪をひき

目と鼻に警察今夜も女立ち

戒サン勝手つんぽでおわしまし

堺市 田中 狂二

一年がメリーゴーラウンドに似て寂し

病院の門に赤旗ひるがえり

貧乏をなぐさめるよに菊一輪

大阪府 林 昌男

猪の話題小屋にも霜が降り

死ぬほどに好きとは言うがよう死なず

愛媛県 村上 旭童

自転車でこけたを父はひたかくし  
ぜい肉をおとす労働さえいとい  
熟睡はいけずする子の顔でなし  
貯金には手をつけぬ気の小さい借  
牛ひいて雷族を遠くよけ

倉吉市 大前 鳴光

歳の市冷たきものの仏具店

ストロブへ尻向けてたまま毒づかれ

鳥取市 北村 三步

機械ではないぞと職制ねめ返し  
課長より小さい判をこさえとこ

神戸市 傍島 静馬

アリアバイに内緒のひとがばれちまい  
禁酒して沈黙勝ちの父となり

笠岡市 木山 遠二

借金が無く年の暮ボカンとし

面会は掛取だった十二月

北風へ加勢のような霞散る

大阪市 村山 光輪

七五三の日

父と子と二代にわたる和服着て

七五三軍国調は見当らず

姫路市 植村 客遊子

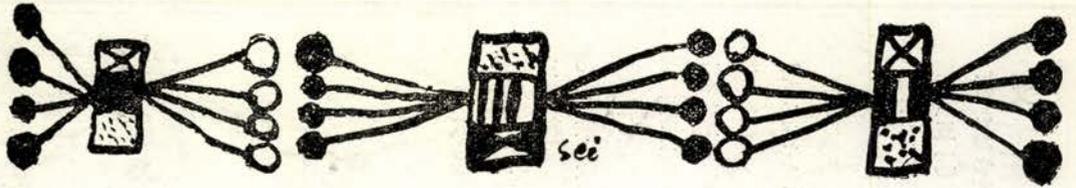
豊作がかくし切れない顔で刈り  
耕運機牛程小まわりして呉れず  
流行でなく安いから買うて着る

岡山市 宗高 矢寸志

手伝いに来てよく笑う台所  
先輩風を吹かせてマダムに紹介し

出来ぬ子の親の期待が大き過ぎ  
参観日新教育をはがいがり

大阪市 河井 庸佑



大阪府 谷 沢 好 祐

電線の風は何時まで引っかかり  
温古知新おにぎり屋が流行り

皇大津市 高 津 徹 也

愚痴が又出て仏前をはなれけり

グランドピアノ持つ娘にもしたくなし

愛媛県 榎 紫 光

利用価値あると見たのか誘い水

町名が城にもあって驚かせ

淋しさを女は駄じゆうで見せ

青森市 工 藤 甲 吉

台秤あまりに軽き己れを見

うらめしくかなしく耐える女房の目

人工の鼻のあたりに冬の翳

玉野市 伊 原 明 林

煎餅の粉をはさんで本返えり

母さんを英語でほめて叱られる

口笛を吹いて始末書かいてくる

西宮市 門 永 三 舟

道つれの女に若さが残る宵

アイロンのメッキも剥けて妻老いぬ

大阪市 藤 村 梨 花

誤解とけぬままにしぐれの街へ出る

耽美派の筆にモラルの無視されて

受難にも似てこおろぎの縁に果て

くちづけも知らず女史だの女流だの

義理たてて来た顔も居る末座

小督の墓所にて

君を恋う琴はきこえず嵯峨の風

相生市 富 永 夢 路

大晦日妻もそろばん膝の上

船員と知って商魂掛値する

金モールずらり並んだ海の初春

神宮市 室 田 千 尋

重役と言うふれこみで移転する

なげやりな夫で世話の仕甲斐あり

気位が高くて一人ポッチナリ

松江市 舟 木 与 根 一

玉のこしなどと家柄見下げられ

出雲弁イヤリングがあわれなり

ハイヒールで失業保険貰いに来

松江市 小 林 孤 呂 二

デイトという意味がわかつてはあわて

さすが都マネキンの様な足ばかり

診察券ちぎれる程に通わされ  
サンドウィッチマンだけ乱れない水雨くる

三井寺で拾田也の鐘をきく

同 舟 近 詠

松山市 前 田 伍 健

春を待つ詩など作ってハナをかみ

岸さんは攻撃馴れのうす笑い

誰れに腹立てたらよいか笑い出し

新党は大売出し中とも云えず

臍かじりつつデモ隊で旗を振り

正月の船らしく金具みな光り

須坂市 高 峰 柳 兎

化粧濃く生活力がたくましい

すぐ怒る癖がみぢめにどもるなり

出稼ぎに発つ駅落葉にうずくまり

自暴酒と知らず妓も度をすこし

今治市 長 野 文 庫

少々の揺れは気にせぬ島育ち

サーピスを商売気だと勘ぐられ

和歌山市 秋 月 宏 方

天声人語きようも政府を叱りつけ

句はつまりわが家の無形文化財

ブームにも浴せずけさの春となり

日曜酷使されたとばかり洗濯機  
水中で待機お豆腐冷たかろ



## 川柳 名句と難句

麻生路郎

〔五〇〕

ガヤガヤガヤガヤ嗚呼日本の民主

主義

ああ、敗戦後の日本は猫も杓子も民主主義を謳歌しているが、

その民主主義と言うのも、ただ

「ガヤガヤガヤガヤ」に過ぎないと皮肉ったもの。

「ガヤガヤガヤガヤ」の上八音字の擬音

の中に今の世相のすべてを包含している巧みな表現がこの句を生かしているのである。学ぶべき手法だ。

〔五一〕

これもおやすみなさいで終ってる

恋文

（薫風子）  
焼くには惜しい恋文である。抽斗深くし

まいこんであったのを、フトとり出して見

たのであろう。

次ぎ次ぎと読んでいるうちに、

「これもおやすみなさいで終ってる」と

気付いたのである。

どれもこれも、家人に内緒で、夜遅く書

いたことがそれとなく想像出来る構成ぶり

がいい。

恋文を見て回想する男の姿が見えるよう

だ。

〔五二〕

女房の生年月日問うて書き

（豆秋）

何かの届けの時であろう。女房の生年月

日のとこでハタと行き詰まる。

「オイ、お前はいつ生れたんや」

とは、どこかの亭主にもありそうなこと。

何んでもない日常の茶飯事をとらえて句に

したものの。軽妙。

〔五三〕

恋を戀して少女のペン習字

（參無子）

少女時代には多くの空想を持つ。あの人

が好きだと思えば、もうその人の妻になっ

たような夢を描く。しかし現実には言いよ

るスベを知らない。

そこで多くの少女たちは恋を恋する。そ

して渡すでもない愛人への手紙をかくが、

こんな下手な字では恥かしいからと、ペン

習字を習うというのだ。

少女趣味をうまくつかんだ句だと言えよ

う。

〔五四〕

持つ者の悩みデノミだインフレだ

（快夢起）

なまじっか財産があると、インフレだと  
言っては悩み、デノミだと言っては悩むと  
いうのである。

持たないものはその点、デノミであろう  
がインフレだろうが、のん気なものだ。幸  
福はどっちにあるか判ったものではないと  
言いたいのであろう。

デノミはデノミネーション（Denomi-  
nation）の略だ。インフレ対策に行う貨幣  
呼称の変更に過ぎない。その変更によって  
心理的効果を狙うもので対外価値には変化  
はないものである。

インフレはインフレーション（inflati-  
on）の略だ。社会の通貨の需要量に対す  
る通貨の相対的に、持続的に膨張すること  
である。一般財政上の必要に起因した不換  
紙幣の増発に基くものであって特に戦時の  
軍需産業に起因して、商品価格の騰貴が不  
均等になり、賃金上昇が物価に遅れるとこ  
ろから一生産部門から自動的に他部門へ波  
及び、資本家階級は寧ろ利得し、負担は一  
般消費者や小企業者にかかることになる。  
そして国民貯蓄の偏在が烈しくなると労働  
攻勢や企業の経理失調が国家の財政失調  
に及ぶことになる。その果ては恐慌であ  
る。

〔五五〕

団体はオーバーを脱がぬまま拜み

(白 星) 個人となると、かなりポライトな人でも、団体となると群衆心理と言うのか、随分と不作法になるものだ。

オーバを脱がぬどころか、神前でアゴダけしやくっておく連中を見かける。軽い穿ちの句だ。

〔五六〕

病み上りテストに歌を唄って見

(夜 潮)

病み上りと言うものは所在のないものだ。日に日によくなって行くことはうれしいことには違いないが、それを喰べちゃいけないとか、そんなことをしてはからだに障りはしないだろうかとか何とかとせいちうさるるものだ。

そこで、そーと歌を唄って見たと言うのである。病後心理をうまくつかんでいると思う。

〔五七〕

舞やめてやっど嫁く気になつてく

(一 二 十)

この句は適齡期の娘を持った親ごころを詠んだものである。親として一時も早く、よいところへかたづけたいと、あせているのに、

「うち、日舞でたつのんや」

と、言つて良縁があつても、なかなかカッ

ンと言わないので弱っていたが、「やっど嫁く気になつてくれ」たのでホツとしたというのである。親の心理をズバリと詠んでいるではないか。

〔五八〕

メンデルの法則酒癖まで似て来

(柳 葉)

メンデルの法則というのはメンデルという人が科学的に研究した遺伝の法則である。

その法則で酒癖まで似て来たと言うのである。何んとおそろしいことだと詠んだのである。遺伝というのは子が親に似ることである。親に似ず、祖父に似ることもある。句としては理智的で文学的価値は稀薄だ。

メンデル (Mendel, Johann Gregor)

は一八二二年に奥国で生れ、一八八二年に亡くなった牧師で博物学者であった。彼が遺伝の諸法則をえんどうの交配実験で解明したのがメンデルの法則と呼ばれているのである。

〔五九〕

日本人どこかへ帰還したくなり

(花 村)

朝鮮人の帰還問題が新聞紙上に大きく取扱われ、はれものに触るような待遇でんやわんやの警戒、多額の税金を費消してい

るのを見て日本人は幾ら住みにくくても、どこへも帰還する訳にはいかないと今更のよりに感じたのである。

日本人もどっかへ帰還したくなつたとはいささか誇張に過ぎるが、今のような日本の政治ではどっか住みよいところがあれば帰還したいと思ふ人間もいるには違いない。しかし帰還をするところがなとなげく、その裏には暗に政治に対する不満があると見ていいだろう。

〔六〇〕

敬老会唯あの頃はあの頃は

(き え)

敬老会の人たちは古い先が短いだけに、未来への希望を殆んど持たない。たまたま寄つても過去の談でもちきりだ。「唯あの頃はあの頃は」に凡その想像はつくであらう。

敬老会は今では七十才以上の人の集りである。

この句の構成は畳み句であるが、その畳み句によって過去の苦勞話や自慢話を巧く描出して思ふ。

〔六一〕

奥様のけだもの振りを蚤が知り

(喜 曲)

いつも、とりすまして奥様ではあるが、閨房ではどんなことをしやべり、どんなことをしているのか、わかつたものではない。この句の作者は奥様のけだものぶりを蚤をもって言わせているのである。

〔六二〕

今日の餌も買たぞタイムレコード

よ (一 瓢)

一工員がタイムレコーダーの前に立つての私語であるが、タイムレコーダーを人間扱いにしたところがヤマである。一日の労働を終つてヤレヤレと言う感慨を巧みに表現しているではないか。

タイムレコーダー (Time recorder)

は一個の親時計と電氣的に連結した子時計に印字機構を組合せた装置で、工場や会社などの人員の出退勤を記録するもの。この句の「タイムレコードよ」は正しくは「タイムレコーダーよ」とすべきだ。

〔六三〕

綴方子は貧しさを恥とせず

(杜 的)

「綴方教室」で名をなした豊田正子に限りはない。こどもの綴方ぐらいあけすけに綴つたものはないだろう。

貧しければ貧しいなりにありのままを表す。しかも貧しいと言ふことを恥だと思ふことすら知らぬ純真さを詠んだものである。

南無日車さよならとも云わなんだ (路郎)



ありし日の日車氏

## 日車翁終焉の地を訪ねて

— 明治・大正・昭和の孤獨の川柳人 —

たようでした」  
「森田八厘坊というのもしましたよ。」  
「兄が路郎先生とお別れしたの？」  
「小島」のときでした。私はもっと大きな、つまり社会にアツビルするものにしたかったので大正13年に「川柳雑誌」を創刊したので。ちょうど「文芸春秋」が出た年でした」  
「兄や小島さんは市岡中学の第一回卒業生でした。」  
「小島六厘坊は落第した」  
「いいえ落第したのは兄です」  
主幹と豊さんの一問一答にこのときはじめて笑声が起る。  
「ほう秀才で落第されたとは、やはり少年のころ、もうすでに大家の風格を備えておられたのですね」  
と、愛二氏も口をはさまれる。

つ年上だった。主幹と小島六厘坊氏とは同年ということになる。  
「小島の家は北堀江にあって、心斎橋北詰西側に小島洋服店陳列所を出していた。厚司にそろばんという六厘坊君や日車君らと私もその倉庫の中で句会を催していたほどの熱心さでした。その後、六厘坊君が結核で魚崎へ転地療養に行ったりときなど、さびしかりうと、日車君は六厘坊君と起居をともにして友情の厚さを示したものでした。」  
小島さん

### 日車句抄

思わじと椿の花を火に焙べて  
二三日新聞も見ず遇うていた  
うれしくも町の半鐘が見ゆるかな  
大阪を牽の端から見下ろして  
返盆を投げたは二十四五の頃  
父の眼に骨まで腐るものと見え  
昔知るだけに哀れな枕許  
飯はどわたしを理性にしたものは  
ない  
三人の子が家いっばいに見ゆるかな  
家のなかより空見ゆる日のありて  
嘘になるまでには十日程かかり  
生殖器ばかりになって生き残り

肖の子としていたのです」

兄おもいの豊さんは、柳友からの通信がくると岳父に内緒で、そつと日車翁に渡しておられたのである。

ことである。

10時40分大阪発の米原行後部の車輻に昔屋から乗ってこられた毎日放送の岩崎愛二氏と落ちあつて、窓ぎわではもう灘の生一本がブンとくる。

「日和(ひより)男がきたからは雨の心配はいらんよ」

と、主幹は窓外へ目を移される。目的の地近く、ここ江州米の名どころ。田ん浦には農夫のすがたはないが、藁ぐろがポツンポツンとつ立っているのを都会人にはその淡調美にしばしは心も洗われるのである。

近江八幡駅は家庭劇あたりで見える舞台の駅のようで、夜行の一人旅ならちよつとセンチになりそうである。

二台の車に一行は分乗する。山茶花の垣に白い花が清浄そのものだ。玄奥のわきには千両の紅と黄の実がこぼれ、雪やなぎがいにじらしい白い小さな返り花をつけていた。邸宅からすべてがやはり

路郎主幹は昨年暮から、故川上日車翁が永眠された近江路を訪うべく、ひそかに手のすくのを待っておられた。

旧友を思うの情は、ついに一月十日、近江八幡市長光寺町小野玄澄医院を訪ねられることになった。玄澄氏夫人豊さん(六四)は日車翁の実妹で、少年少女時代からの翁のよき理解者であり、ために童王町山之上に住むこと夫人の元へ帰えらず、実妹豊さんにみまもられ、一人さびしくこの世を去られたのである。おもえば故川上日車翁は孤獨で一生を貫きとおした川柳人であったようである。

近江路を訪ねる日、路郎主幹の随行員よろしく、正木水客・橋高薫風子・久米奈良子・林宏子諸氏にわたくしがその榮に浴くしたものである。

ことしは暖冬のせいとか、あまりスキーヤーにもあわなかったし、正月も十日ともなれば大阪駅は思ったより閑散でまずはホツとした

「父にしてみれば悪友が多かったと嘆いていたときもありました」

「その悪友の一人が私だった」と、路郎主幹が云われると、また笑いが流れる。そのころには毎日新聞社近江八幡通信部主任の喜多治久氏も見え、4Bがザラ紙にいそがしい。この日の記事は一月十二日付毎日新聞滋賀版に載った。

翁の奇行の一つとしてこんな話もある。編集会議を南地一流のお茶屋でやり、きれいだこの芸妓をときには二十人も侍べらし、そこで次号の企画をし、文学を語り、川柳発展に心をくだくのだが、せっかくならば芸妓はほったらかしで、呼ばれたほうの芸妓は芸妓で仕事のじゃまをしてはと、すこし離れた後方で勝手なおしゃべりに余念がない。成駒屋がどうの、河内屋がどうのと鴈治郎や延若の話をしておれば花がついているという風変わりな散財であった。つまり一つの座敷で、編集会議をする数人の一団のかたまりの後方に、二十人ものきれいだこの一団が別々にいたわけである。この芸妓衆の一団を屏風(びょうぶ)とよばれていたそうである。脂粉ただよう女人群屏風の前で柳論を咲かせたこのデラックス編集会議を、

「よき時代の、よき人たちよ」とは愛二氏の明治への郷愁であ

ろうか。

すべてが計算ずくめの今日、まるで夢のような話ではあるが、ここには明治の気骨というようなのが如実に出ていていると思つた。しかしこの豪快な逸話の反面、日車翁は人一倍さびしがり屋ではなかつたかと思われるふしもあつた。



故日車翁仏前で左から、正本水客・不二田一三夫・岩崎愛二・藤生路郎主幹・日車氏令妹小野豊・橋高薫風子・久米奈良子諸氏。(写真・毎日新聞提供)

主幹のお話をうかがっている。と、明治・大正・昭和の三代にわたって、日車翁はさすがに青年時代から、川柳革新運動のトップに

立たれただけであつて、作家としても、特に情緒豊かな作品には代表的な佳吟が多かつたようである。南向きの縁側へ静かに雨が糸をたらし雨の音だ。柴田勝家ゆかりの瓶割山が写真のピンボケのようになつてくるのが窓ガラスに美しい。

32年7月号といえは本誌の古稀特集号だつた。どうしてご寄稿ねがつた。

「雪」の頃」と題されて、小見出しには、路郎と私」とある。日車翁が本誌へ書いてくださったこれが最後の原稿であつた。ちよつとそのうちの一節をご紹介します。

古川柳には、古川柳独得の味いと響きをもっている。私たちは久しくそれに浸つて川柳作家としての揺籃期を過ごした。だが少年期はやがて迎える青年期の前提である。少年期に「紅い」と映つたものそれは、

伝承的に「紅い」であつて自己の発見した「紅い」ではなかつた。ここに少年期と青年期との間に一つの曲り角がある。その曲り角を意識にとめず一直線に歩みつづける

のも、透徹した一つの道ではあるが、自己に厳しい執着をもつ

者にはそれができない。そこに青年期の浮水が横たわる。路郎と私が手を携えて「雪」を発行したのは、まさにこの曲り角に立つた時であつた。(註、「雪」大正四年創刊)

路郎主幹はこの小野家を、日車翁の遺跡として後世にのこし、近江路を訪う川柳人が日車翁を偲ぶよすがとした意向を明らかにされ、翁のために出版もし、旧友の霊をなぐさめたいとのべられると、令妹豊さんの眼から感謝の涙が一すじ二すじ頬をつたわつた。

「日車君の句にお雑さんという女性が出てきますが、実感でないと作れない句なので実在の人か架空の人か、よく考えさせられました」

豊さんの答えを主幹はノートにペンを走らせておられる。「遺書は？」

これらのことは、いつか主幹がペンを執られるのでここでは割愛するが、かつては革新的作風で柳界に新風を吹きこんだ名作家だけに、主幹の友情のペンへわれわれも大きな期待を寄せている。34年11月9日死去されたが、晩年は日陰の人として家庭的にも恵まれず、33年中風を病み、不遇の生がいをとじられたのである。翁は旧八幡町史を研究、町史「太湖」を発刊「八幡商高五十年

史」の編集を担当するなど郷土史の研究にも励まれた。夕やみせまるころ「先輩」の題で随行の私たちは句箋を捧げ、この大川柳人へ合掌した。

★

何事もなかつたように近江路は霽れる 路郎

先輩の顔も通らぬ就職難 愛二

活けた花に額に先輩生き 水客

妹さんの立ち居から未知の人思はれて 同

初対面むかしの話がすぐに出る 同

ひとつ上の先輩という偉さかな 同

先輩の遺跡を訪えば雨になり 薫風子

楯重の裸婦横たわり日車亡し 同

寂しさを語ればうまがいそう 奈良子

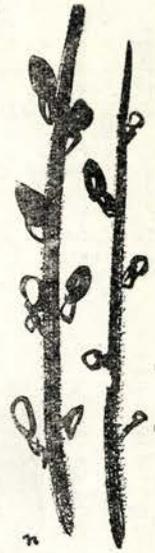
先輩と同じ水にて育ちし 同

先輩を訪ねた部屋は山が見え 宏子

先輩の写真の前でもてなされ 同

みずうみの如し故人の逸話聞く 一三夫

(文責、不二田一三夫)



# 柳「年となり」

北川春巢

桜かねと落付いている年になり

暑往寒来歳亦茲ニ新矣王夫人ヲ始奉リ  
全族御勝栄可被重魚算万福之ニ過ギズ  
候乃父亦頑健加馬齡候御省神被遊被下  
候様王夫人へ御伝達可被下候

右は明治十年頃の年賀状の一例で、父の  
大江卓から子の太あてのものであるそうで  
ある。「重魚算」だの「加馬齡」だのほも  
ちろん年を一つ取ったことをいうのであ  
る。明治以来我々が年を取るのには正月であ  
った。が昭和二十四年の「年令となえ方  
に関する法律」発布以来、年を取るのには各  
人の誕生日ということにきまって、正月で  
はなくなったので、近頃の若い人にとって  
は、正月が来たからといって年を取ったと  
いう感じがしないらしい。ところが我々職  
前派にとってみると、年を取るのはどうし  
ても正月の方が都合がよいように思えて仕  
方がない。

二

桜かねと落付いている年になり  
という路郎先生の句がある。桜の句である  
から、正月になって年を一つ取った、とし  
みじみとした感じで作られたものでないこと  
は確かであるが、「年になり」と詠まれた  
のは、ご自分の年を改めて感じられたこと  
は間違いない。  
もう世辞を世辞として聞く年にな  
り (路郎)  
これは句集「旅人」にある句であるが、路  
郎先生が新年に当って詠まれたものかどう  
か、出所を捜したがちょっとわからなかつ  
た。  
私はここで「年となり」という句を、手  
近かの「川柳雑誌」から拾ってみた。「年  
となり」の句に新年に年を取った正月気分  
が出てるように思えたからだ。「歳とな  
り」や「齡となり」も句主が意識してくれ  
らの字を使い分けたかどうかからぬが、  
同じ意味として同列に取り扱った。  
定期券僕も鯖よむ年となり

大臣が小粒に見える年となり (風船堂)

老眼鏡忘れまごつく年となり (酔舛)

坊さんの予算へはいる年になり (春雄)

「年になり」も「年となり」も文法的には  
同じ意味に解せられよう。  
賭け話淡々ときく齡になり (ゆたか)

どたん場で短気おさえる歳になり (伍健)

ためらわず飛田を抜ける歳になり (萌芽)

いうまでもなく、飛田は昔大阪の遊廓地  
帯、赤線地帯で、東京の吉原と匹敵した  
所。現在でも何だか怪しい噂のある所で、  
良識ある若人の足を向ける場所ではないと  
思われてもいる。  
逢いに出る白粉洗う歳になり (兎)

人前で妻いたわれる年となり (千代美)

血圧を直ぐ計られる歳となり (春雄)

置き薬の方が安心な歳になり (無鬼)

信号の青まで待てる年になり (方大)

お悔みははっきり言える年となり (保美)

近所火事そうかと寝てる年になり (八歩)

菜食の話へはずむ年となり (満潮)

保険屋の笑顔が見えぬ齡となり (北海)

降って来たから止めようという年  
になり (夜潮)

意地張りは損と気のつく齡となり (薫風子)

白粉のむらも気にせぬ年になり (柳葉)

文化財いじくる程の年になり (明美)

(柚蘭坊)

三

ここで、以前路郎先生が「続川柳講座  
(25)」(本誌第二九一号)に「なり止め」  
の句について書かれたことを振り返って見  
たい。

「なり止め」というのは、「歳となり」  
「年になり」のように、十七音字の終が  
「なり」で止まっている句を総称してい  
るのである。一口に「なり止め」とい  
っても、これに「或り」止めと「也止め」とを  
区別できるのである。「年となり」の方は  
「或り」であって、「或る」という動詞の  
連用形で止めたもので、連用形で止めるの  
は柳権以来川柳における独特の表現法であ  
る。路郎先生も例に引いておられる

我々の家にあるから贖になり (点漁老)

養うてあげるといわぬ妻となり (雅幽)

などの句の他、手近かの「川柳雑誌」からでも

肩のこる本はほこりで白うなり

(淡舟)

女房のカミソリ耳が邪魔になり

(香林)

幸福に第六感が鈍くなり

(葉光)

置炬燵マジックバンド欲しくなり

(淳一)

などといくらでも例が見られるのである。また「成り」でなく「鳴り」もあり「生り」もある。

肥車挽いて通れば三味がなり

(旭童)

素人のなすびは十一月もなり

(春巢)

次に話はわき道へそれが、「也止め」の「也」は、助動詞の終止形であって、国文法の本を見ると、これが終止形に続く場合は、伝聞、推定、詠嘆の意を表わし、連体形や体言などに続く場合は、断定の意を表わすというのである。川柳の場合、終止形に続く「なり」は詠嘆の意味がほとんどなのである。

パンとミルクの食事へ記者を待たすなり

(路郎)

待たす(終止形) → 詠嘆

お達者をほめれば貧乏ぐちるなり

(春巢)

ぐちる(終止形) → 詠嘆

退職で時計の音も変るなり

(雄声)

変る(終止形) → 詠嘆

甘辛街ただ見るだけのところなり

(梅志)

ところ(名詞) → 断定

首のない同士で飲んで気焔なり

(三司)

気焔(名詞) → 断定

台所の革命とかは月賦なり

(多久志)

月賦(名詞) → 断定

女関と勝手ジキルとハイドなり

(省三)

ハイド(名詞) → 断定

ここでもう一度考えなければならぬことは、文法的には以上のような区別がありながら、終止形に続く「なり」の詠嘆の意味に引かれて、体言に続く「なり」にも詠嘆の意味が乗り移っているように、私には思われるのである。

詠嘆は「わい」と訳すことを中学の国語の時間に習った。「退職をしてから時計の音も変わったわい」というように、ところが

女関と勝手ジキルとハイドなり  
の句も、「女関では紳士のジキル、勝手へはいれば悪漢のハイドというふう豹変するわい」というように詠嘆の意味に考えられぬこともない、と私には思われる。意味の混乱というか、あるいはそれが短詩型文芸なるが故の特殊感覚によるものかは私にはわからない。

路郎先生は前記「続川柳講座」の「なり止め」の句の結論として、

「成り止め」の句も「也止め」の句も穿ち味が出るところに特色があるが、それだけに説明句に陥り易いという難がある。

と戒めておられるが、「説明句に陥る」というのは、断定の意味が強くなるからではないかと私には思われる。作者のひとり合点で断定しても、読者には単に「そうですか」とだけしか感じられないとすれば、それは説明的に終ってしまうという意味である。これも「也」に断定の意味があるのが、混乱して受取られる結果になるためであるまいか。

四

ところで私はもう一度「年になり」の句に戻らなければならない。

「也」に詠嘆の意味があるために、「年になり」の「成り」にも詠嘆の意味が感じられるのは私だけであろうか。新年に当り一つ年を取って「自分も…するようになつたわい」とつくづく詠嘆するのである。それが同輩の人の句である場合には、読者の共感も得られ、「成程なア」と穿ちの意味に取られるのである。「年になり」というような句は、概して若い人によって作られることは少いようであるが、そんな句を年令が余りにも違い過ぎる若い人達が読むと、「断定」の意味に取って、説明句のように思われても致し方がないように思う。

の句であっても、若い人は「さよか」で片付けてしまわぬとは限らないと思うのである。

要するに「也」に「詠嘆」の意味と「断定」の意味とがあるがために、「成り」止めの句にもその類推により、「詠嘆」と「断定」の意味が含まれるように感じられ、「年となり」の句に至っては、読者の年令により、作者が穿ちのつもりで作った句でも「断定」の意味に取って、単なる説明句と思ひこんでしまう危険もあると思うのである。

五

私は年頭に当り、手近かの「川柳雑誌」から「年となり」で終った句を拾い、しみじみとその作者の年令を思い、心境を推し計り、併せて「なり止め」の句について、以前路郎先生が「続川柳講座」で説かれたことに蛇足ながら追加を試みた次第である。

色紙短冊  
書画用品

大坂戎道しる所  
丹生堂  
電話セニ、セニ

# 寄れば川柳の話



— 句評座談会 —

清水 白柳  
早川 清生  
橋高 薫風子  
西川 青風  
吉本 青風

白柳—皆さんお忙しいところを

よくお集り下さいました。時間が  
ないので早速始めましょう。見え  
ん進行係を勤めて下さい。

見—句評に入る前に一言だけ申  
し上げておきます。句評と一口に  
言いますがいろいろな方法があ  
って、必ずしも評者が頭ごなしに  
作品の価値を極めつけてしまうも  
のばかりではないのですが、一般  
にはこの様な印象を与えていると  
思います。これを避けようとする  
ときおいべた褒めの句評になら  
ざるを得ないので、どちらにし  
ても面白くありませんから、私達の  
場合は特に批評ではなく句に対す  
る各人の感想或は放言という事  
にして貰って、忌憚のない意見を述  
べ合いたいと思います。では次の  
句から始めましょう。

売れ残る胡瓜個性の強い  
奴ばかり

見—この句は字余りだしスタイ  
ルが一寸交っているので、いろい  
ろの御意見が出る事と思います。

清生—さすがに巧妙だが、ちょ  
っと頹想がある感じを持たれそ  
うだ。

薫風子—胡瓜に托して人物をう  
まく描写しているじゃないか。

白柳—この句からそこまで深く  
考えられるだろうか？ 薫風子君  
は個性という言葉にひっかかった  
んじゃないかな。

見—単に個性という詞の技巧だ  
けでこなした写生の句ではないと  
思う。この句は写生を通して作者  
の主観が強く打出されているの  
で、この場合の売れ残る胡瓜の一  
つは、或は作者自身ではないかと  
私は思いますね。

白柳—この句に限らず、あらゆ  
る句は作者の主観の投影に他なら  
ないのだが、私には君達がいう程  
深いものはこの句から感じられな  
い。

清生—いや、矢張り粗影氏の人  
生観だと思えます。然し内容の問  
題だが、現代は個性の時代であっ  
て、世に抜き込んでにはむしろ個

性が必要だとも言える。

見—それは反対だね。個性の尊  
重されるのは芸術の世界位で、現  
実の問題として個性を生かそうと  
すれば社会から締め出されること  
が多い。胡瓜でも変な格構をして

いるのは売れないよ。

清生—個性と我(が)は違うし、  
个性的ということとは協調性がな  
いということでもない。

薫風子—この句は作者の人生観  
だとかいう風な深刻さではなから  
う。ただ一人物が胡瓜の形に同感  
している感じが充分受け取れると  
いう程度でいいのではないかと  
つまり売れ残る胡瓜に自分を見出し  
て苦笑している図だ。その方が飄  
逸で面白さが深まる様だ。自分を  
なぞらえていると僕が云うのは  
「奴」という語句の響きからそん  
な匂いを感じるのだ。

青風—僕はこの句を、胡瓜と個  
性との取り合わせの興味だけだと  
思うね。

見—私はそんな小手先だけの技

巧ではない深いものをこの句から  
感じた。

白柳—破調のところがこの句を  
殺していると思う。もっと推敲し  
て欲しいね。

見—そうですか？ 私は破調  
になっていてことで個性の強い奴  
という言葉が一層生きて来ると  
思うんだが……。

清生—この種の句ではリズムは  
あまり問題にならないが僕はこの  
場合の破調は成功してないと思  
う。真中で切ったことが句を弱く  
している。大体、用言が多いと句  
の印象が弱くなるようだ。

薫風子—上五が八の字余りにな  
っていないが、中七下五が字余り  
ではないから、僕としてはこの句の  
破調はそれ程気にならない。

見—言い足りないけれど此の辺  
で次へ移りましょう。

死火山のような女も疑わ  
れ

清生—この作者の句は一般に清  
冽な感じがして着想も秀れ余韻も  
あるが、ちょっと自己陶醉の感が  
あって惜しい。

見—死火山のような女という表  
現のはっきりしたイメージが僕に  
は掴めないんだが。

薫風子—未亡人だろうね。女の  
一面、女の体質というものをある  
程度うがっていると思う。

見—未亡人だなんて、どこから  
出て来たんだ。

白柳—未亡人というのは少少飛  
躍が過ぎるようだ。内気な女の  
性格を死火山という詞で表現して

いるのではないか。

薫風子—死火山とは且つて火を  
噴いていた山のことだからね。僕  
は初老の寡婦と受けとったが……。

白柳—死火山というのは現在の  
山の姿を捉えているので、昔燃え  
ていたところまで遡るのは  
不賛成だね。

清生—いずれにもせよ表現はき  
れいだが見念に遊んでいるよう  
だ。内容をもっと具象化して事物  
の核心に迫って欲しい。情感を流  
し放しにせず、内面に立ち戻ると  
ころが出来ればもっとすばらしく  
なる人だと期待している。

見—死火山という比喩で具象化  
しているわけだが、その比喩がも  
つびつたりこない。然し川柳に  
何か清新なものを生み出して行こ  
うとする努力は大いに買っていて  
べきですね。

ハンストで胃病を直すつ  
もりかや

薫風子—座五の「つもりかや」  
のリズムにある憤りの籠った突き  
放した感じがこの句の生命だと思  
う。問題になる「かや」だが僕は  
適切だと思う。

清生—無理に文語にしなくとも  
「つもりかい」でいいのではない  
か。内容は勿論現代であるし、用  
語も他の部分はすべて口語だろ  
う。なにか作者の思想までもが古  
いような感じを与えて損だ。

見—「かや」という詞でユーモ  
ラスな効果を狙っているので「か  
い」では単純になってしまう。

青風—僕は「かい」で言い表わ

せぬ冷たさが、「かや」で表われていると思います。

白柳—私は結びの「かや」という喩がこの句を生かしているの社会諷刺の句としては一応成功していると思う。

清生—川柳家がスト等を詠むと必ずこういった冷笑的な句になる。もって社会の本質を衝いて欲しいものだ。

白柳—冷笑という言葉は当らんとする。僕はこの句からも温かみは汲みとれる。

清生、薫風子、青風—温かみは感じないね。

晃—然し冷笑とまで言い切るのには不当だ。憤りはあるがそれも社会をより良くしたいという願望につながっているのだから、冷笑というような軽薄なものではない。

清生—社会批判の句に於いてその内容は勿論作者の信念から発するわけだが、常に世論の第一線に立つという誇りが必要だろう。この句も世論の或る部分を代表しているわけでこの種の意見の中では個性的だろうが、ちょっと時流に背を向けた感じだな。

晃—ストや坐り込みをやるのが進歩的なのではない。電鉄のストや郵便のストに対して、迷惑を蒙る側では腹を立てるのは当然だし、又批判されるべきものが多分にあると思う。

清生—いや僕が言いたいのはストの是非ではなしに、時代を動かす力の根源を把握して欲しいということだ。

晃—君は少し欲張り過ぎていたよ。

薫風子—先に述べた座五の調子と、内容のドライな滑稽さでこの句の批判は成功している。又胃病を癒すに直すとした作者の意図も推察出来るではないか。

日曜日妻と朝刊分け合う  
保美

薫風子—若く明るい感じに溢れたスタイリスト保美君らしい句です。

清生—家庭用川柳の最たるものだね。情景が躍如としているではないか。僕のレパートリにはないけれど。大体、こういった句は素直に鑑賞すべきで理屈を云えば味がなくなってしまう。格調の高い句ではないが、若い僕たちには共感がある。

晃—僕はもっと現実になまなましくつながつている句、つまり現代に対して何らかの意味の抵抗感をもっている句でないと魅力を感じないね。日曜とか朝刊とかいう詞を変えたとこの句の内容は古川柳の世界からそんなに距離はないので、僕はむしろ古いと思う。

薫風子—この句は立派に現実につながつたなまなましい句だよ。というのは大袈裟だが、先ず新鮮でどのかな朝の雰囲気を感じられ、若い夫婦の何でも分け合うての新しい生態が適切に朝刊で代表され、絵画的な情景にその円満さまでを感得させている。朝食のトースターからパンの焦げる臭いがして来そうだよ。

清生—こうした日常些事の中に夫婦愛の機微を見つけ出すのも川柳の一つの方向だと思う。

晃—家庭用川柳が川柳の一つの方向である事まで否定するのではない。然しこの句のどこに現代性があり、夫婦愛の機微があるのだろうか。

薫風子—それが判らないのは君の生活と感覚がすでに古いからだとしか云いようがない。

晃—君の鑑賞をもって新しいとするのだったら、その新しさとは随分皮相的なものだと思う。

白柳—若い家庭の一コマを描写したに過ぎぬ至極平凡な句と思うが、それは私の頭が古いからかな。

晃—調子の良さは認めるが、内容的に言ってこの句のどこに発見があり創造があるというののだから。

青風—朝刊を分け合うて読むという事に現代女性の地位の向上が窺われます。  
晃—その程度だったら問題にする程のことはない。昔だってそれ位のことは絶無ではなかっただろう。

薫風子—スタイリスト保美君のカップルを代表とするわれわれの世代がある。  
恋を恋して少女のペン習字

清生—大変な少女趣味だね。  
晃—名前からして夢虹だからね。作者は男性です。作者と年令に於いて一番近い青風君の感想を

聞いて見ましょう。

青風—僕はこの句にはついて行けないね。大体僕は木下惠介より黒沢明好みだから。然し暗い現実に対して美しい夢も必要なのではないかという意味でこの句の存在価値も或る程度認めます。

薫風子—観念的な句だ。僕は日頃から作家の観念の、鋭くて優れた表現を高く評価するのだが、この句は平凡だ。句主は四才の時からカリエスの病床にある。こういう「からだ」で感じたのではなく頭の中で創造する作者があっても然るべきではなからうか。

晃—それは言うまでもないことだ。夢虹君の作品として低調だが、少女趣味と一言で片付けるのは酷だと思ふ。観賞者が、リアリストであるのとロマンチストであるのとはこの句の価値は大分違ってくるだろうね。

清生—きれいな事にすぎて現実感に乏しい。然しこれが病床にある作者の幻想だとすれば淋しいなあ。登場人物は作者の夢を表現する俳優と言うからね。  
晃—現実性が稀薄だと言う事が必ずしも作品の価値を決定するものではない。作家としての立場の相違だろう。

清生—僕は作品の価値を云云しているのではないんだ。  
白柳—恋を恋してとたまたみこんだ手法によってこの句は生きているという事が出来る。少し甘いなあと思うのも年代の差かも知れないね。作者は二十才の青年だから。

青風—恋をしてとはうまく言ったなあ。

晃—そうだろうか？ 私は有りふれた表現だと思ふけれど。趣向としては少し陳腐じゃないかね。

薫風子—句には恋を知らぬ少女の恋を恋するムードは出ているが、「恋を恋して」と云う表現がむき出しなんだ。一枚皮を被せたい。それが夢虹君の課題だと思ふ。

ロッキードグラマン僕は  
鶴を折る  
忠太朗

晃—時事吟としては割合良い句だと思ふんだが。作者の再軍備に対する抵抗感と平和への祈りが或る程度出ている。

清生—「鶴を折る」で平和への祈りを表現しているのは良く分るけど手法としては常套的ではないか。安易に妥協した感じだな。仮に「日本にも原子炉僕は鶴を折る」「また渡米する岸僕は鶴を折る」と置き換えても通用するので鶴の必然性は乏しいようだ。

白柳—「鶴を折る」というのは祈りでもなければ希望でもない。機種選定問題に対する作者の無関心を表明しているだけではないのだからかと私は思う。

青風—無関心というよりも、そんな論争に対して愛想をつかしたあきらめに近いなげやりの気持ちが出ていると思う。

白柳—僕が無関心というのも実はそれに近いんだ。

清生—作者が批判している事は

判るが、それならどうしようと云うのか。解決がないではないか。

晃—そこまで十七字の川柳に求めるのは無理ではないか。作者がどうしようもない自分の無力感を嘆いているので、それだけでいいと思ふ。

清生—批判詩としての川柳の限界をそんなに狭いものとは思わないね。大衆への指導性もあっていいのではないか。

晃—指導性があっても勿論いいが、無ければならぬというものは無い。それは作者の個性の問題だ。余り川柳を功利的に考えようと文学性が薄くなる。

清生—指導性と功利性は別に關係ないだろう。

白柳—時事の句としてはスケールが小さいので、現在であれば良く解るが後年に難解になるおそれがある。昨年の大阪市民文化祭の受賞句に

ニッポンの政治あちらへ  
聞きにゆき 柳志

があるが、この句はスケールの大きさというか、非常に水いいのちを持つ様に思えるが、ロッキードの句はいのちが短いと云えそう

だ。  
晃—時事吟というものは一般の句と別にして考える必要があると思ふ。時事吟はその時だけのいのちを持ってはよいので、私はこの句が諷刺だけでなく折りを持っているのがいいと思ふ。

清生—この句は作者の頭の中で出来た句で、実際に機種選定問題

の真相に触れたらもっと怒りが湧くべき筈だと思ふ。

晃—勿論作者も怒りは感じているのだ。然しその怒りから直ちに實際運動に入れる人と入れない人がある。それは個性の問題もあるし、思想の問題も、生活の問題も含まれているだろう。鶴を折るという事は単なるあきらめだけではないと思ふ。

清生—機種問題も現在は選定の方法に疑惑が持たれているのであって鶴との結びつきが弱いよう

だ。  
雀にも背の高いのと低い

のと  
きさ子

晃—僕の好きな句だ。雀の一字がとても効いている。これはあの小さな雀でなければならぬ。鳥ではないけれど、まして牛馬ではぶっこわいなし、又雀より小さくてもいけないと思ふ。日常目にするわれわれに親しみの深い雀だからこそ句が生きているのだ。

又、「高いのと低いのと」と云う重ねて対照させる表現法は屢々理に落ちり易いものだが、この句からはそういった感じは受けずに円い句に仕立てているのは作者の手柄だと思ふ。

清生—川柳の暗喩の句だと受け取れないでしょうか。意図が露出しすぎていいこともないし伝達性を失っていいから一応成功しているのではないからか。この方向を押し進めれば川柳に新しい境地を生み出す事が出来るだろう。  
晃—とすると作者は雀によって

何を表現しようとしたのでしょうか。

清生—人生だろう。

晃—人生では余りに抽象的にすぎる。もっと具体的に言ってもらいたい。

清生—この句はそんなに深刻がっていない。暗喩にもはげしく特定の事象に迫って妥協を許さない場合と、漠然と社会や人生を暗示し具体的な解釈を読者の知性にゆだねる場合とがあろう。

白柳—晃さんのようにそんな理屈っぽく考える句ではないと思ふ。

晃—同感だ。小さな動物への小さな発見へのおどろきが大切に深く考えたとその良さがうすれて行くように僕には思える。些細な発見に作者の小動物への愛情が出ているのだ。彫塑的な感じの句だ。

晃—何だか変な理論だね。深く考えたと良さが薄れるというのなら其の句は決して佳い句ではない。  
清生—それはおかし。句には当然考える句と感覚で捉える句がある筈だ。すべての句を理屈で割るべきでない。

晃—私はこの句を感覚の句というよりもむしろ考える句の範に入れるべきだと思ふ。

晃—私には案外平凡な句だと思ふが、ひよっとするとこの平凡は或は非凡かも知れない。皆があまり

感心するから何かあるんだろうと今考えているところだ。

白柳—具体的には表現しにくい。この句は川柳の軽みと適当なウイットを持っていて私は非常に惹かれた。こういった句がもっともって出てほしいと思ふ。

清生—きさ子さんの句はいつも綺麗な句ですね。満ち足りた生活をしている作者の温かい眼が感じられてほほえましい。

清生—単に写生の句とすれば絵本を見るような可憐さと幻想的な美しさは認めるが、一面あたりまえの事であってさほど高い価値は感じられない。僕には詩的な飛躍が余り感じれないから胸に訴える力が弱いように思ふ。

愛されることも重荷に病んで  
花美

晃—愛されることが女性の身上だ。それが重荷になると云うのである。長らく病床にある女性の心理を端的に表現出来ていて好い句だと思ふ。

晃—短歌的叙情の句だね。一寸ウエットに過ぎる感じがしないでもないが水準に達した句だろうね。

清生—女性の心理はもっと複雑だと思ふ。僕にはありふれた小説のような感じがする。然し短詩型にそれ以上のものを望む方が無理かな。

晃—この作者自身の境遇になり切った鑑賞したら、安っぽい小説の感じがするとは言えない句だ。それに感傷に溺れることな

く、句に自己を凝視する目を感じられるので救われている。その点「病んでいる」と云う座五は多少なまぬるく、もつとつきつめた憔悴感を出す様に引き締めて欲しいと思ふ。

白柳—愛されることも「も」が非常にこの句を生かしていると思ふ。

野良犬も乞食の帽子のぞいてる 天悟空

清生—この「も」にも情感があつて成功だ。飄逸味があつて漫画になるようだが、よく考えて見ると乞食と野良犬という放浪者同士の間を生じる哀感を巧みに把握している。ただちょっと作意が感じられてアルティスト(芸術家)というより、アルティザン(職人)めいたところもあるが。

晃—清生君と同じ意味で僕はこの句をとらない。「も」に情感があることも判らない。野良犬と乞食と、それに小道具のよれよれの帽子と、取り合わせが過ぎているし、「のぞいてる」という情景描写も稚拙だ。不自然だから哀感には遠い感じだ。併し、所謂つき過ぎた句でも、感覚の鋭さ、批判の深さによって充分救われ、好い句になる場合も屢々あることをこの際断っておきたい。

晃—批判を主体とする清生君と叙情を主体とする晃風子君との鑑賞の差が出て面白。白柳—この「も」は自分も含めて「も」で作者の主観がこれに出ていて私はこの作品を良いと思ふ。

薰風子—この句の批評とは別に「も」の意味の多様性を僕は常に考えさせられている。「も亦」の意味の稀薄な「が」に近い「も」があるんだ。

清生—日本語の非論理性をついたね。事「も」に關するだけでなく、川柳家にはこういうった面の勉強も必要だね。

月給取り羨やみ月給羨やみ

宗太郎

薰風子—内容も表現も所謂川柳的な句で、充分うなずけるものを持っていて面白い。いい句だと思

清生—この句は非サラリーマンの角度から詠まれたから僕には着眼点がいいだけで内容的にはありふれた事だと思えない。

月給取り羨やみ

宗太郎

薰風子—浪人時代は過ぎたよ。

清生—この句は非サラリーマンの言葉の矛盾をついたのであって作者の意図は判るが、安易に句にしたとしか思えない。もっと核心に突っ込むという努力を怠ったように思える。

清生—日本語には屢々主語が省略され、自動詞と他動詞の区別もないので意志の疎通を妨げることがある。この場合用語上の厳格な意味では月給取りを羨やんだのは作者でなければならぬが、慣用上または短詩型の故をもって作者が羨やまれたと解することも許さ

れるかも知れない。この場合句が提示する現象は同じでもニュアンスは当然異なる。

薰風子—安易に句にしたといつてもこれ以上どんな表現が出来るというのだ。充分云い尽しているじゃないか。そうなる表現以前のテーマの問題になってくるのではなかろうか。

白柳—言いつ切ってしまったというけれど「月給取り羨やみ」が確

白柳—僕は諷刺よりも詠嘆の感情をもった批判だと思ふ。

薰風子—サラリーマンを詠んだ句は、定年の悲哀だとか、薄給だとか暗い面ばかりで、仕事に満足して居る気持ちが余り詠まれていないが、人生の大半を費やす天職への愛情といったもっと明るい面も捉えて欲しいですね。

薰風子—川柳家は自虐趣味と懐古趣味のところが多分にある。事実「貝になりたい」とは思わぬものまでが「私は貝になりたい」と云うんだ。「明日の光になろう」という風潮に持って行かなくて

寝る為の酒を子の眼よ妻の眼よ

一瓢

一瓢

白柳—寝る為というのは、勤めから疲れて帰ってやれやれといった気持ちと、明日に備える為のくつろぎを求める気持ちをいっただけであらうと思う。

薰風子—一読して意味がはつきりしている句だ。言葉の末節をとやかくいわずとも良いだろう。この家庭の空気が実に入りありと汲みとれて、父親の心理も余さず表現出来ていると思う。

薰風子—僕の予想外の解釈ですが、そういう非常に深刻な立場の父に対して子の眼よ妻の眼よの冷たい感じの言葉をどう受取るのか。

薰風子—それが人間の哀しさだと思えます。最愛の妻といえ子といえ尚通じ合わぬものがあるのを此の句から感じます。

清生—僕も眠る為の酒だと思ふな。然し妻の眼子の眼にはいたわりの眼もあるのではないか。眼の実態があらわされてないのがこの句の欠陥だ。

白柳—冷たい感じているのはつまり作者の良心の眼だ。妻や子は本当にそう思っていないかも知れぬ。

薰風子—此の眼は当然しんしゃ

くのない冷たい眼だよ。「子の眼よ妻の眼よ」と畳みかけた表現法と、効果的な「よ」の使い方が非凡だ。父親の反発するような心理、哀願するような心理も出てくる。

白柳—冷たい縁にあらわしているのは作者の誇張であってこの眼の中には温か味があることが感じられる。

薰風子—悩みからくる酒ならば短期間のものだろう。僕は習慣になった一合二合のささやかな寝酒と素直に解釈したい。原句の語句に忠実にね。

薰風子—悩む酒なら家では飲まんでしょう。

清生—そうとは言えぬと思う。子の眼よ妻の眼よという強い響きの中に作者の苦悩がありありと出てくる。

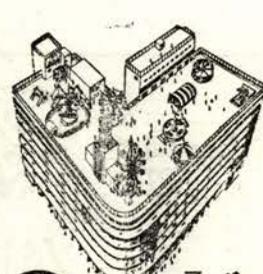
薰風子—明日も亦働きに出掛けるのだ。ぐっすり眠り疲れを癒すための一合二合の寝酒じゃないか。妻よ子よそんな冷たい眼で見つめてくれるの意で句外にこれに反発する父の心理もうかがわれるのである。妻と子は手内職でもしながら父親の独酌に冷たい視線を送っているのだ。

白柳—冷たい感じているのはつまり作者の良心の眼だ。妻や子は本当にそう思っていないかも知れぬ。

薰風子—此の眼は当然しんしゃ

くのない冷たい眼だよ。「子の眼よ妻の眼よ」と畳みかけた表現法と、効果的な「よ」の使い方が非凡だ。父親の反発するような心理、哀願するような心理も出てくる。

お買物は近鉄へ

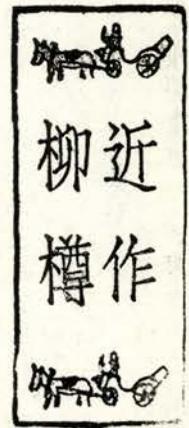


アベノ  
近鉄  
電話 5331

清生—常任筆隊の間に詩を見出すというタイプも川柳にドラマを盛り込もうとする考え方もあっていい訳だが、一つの句が両方に解釈されるということは表現が不適確なのかな、それとも短詩型なし文芸の宿命なのだろうか。(哲学や思想の問題でそんなことがあれば大変だ)作者の意図と異なった意味で賞讃することは作者への大きな皮肉だろう。

薰風子—驚くべき詭弁だ。鑑賞も作句同様素直でありたい。

白柳—皆さんの忌憚のいい意見も聞かして戴いてありがとうございます。一つの句に対して賛否両論で鑑賞の仕方が各人各様非常に違うのに驚きました。どれも結論らしいものは出ていませんが、それは読者の方でして下さると思います。終電車も近いのでこれで終らせて戴きます。では皆さんありがとうございました。



麻生路郎選  
北川春巢選

待ちぼうけお巡りさんがまた通り 小松市 関戸宗太郎

学巢を第二志望でスタートし

天国へ行きたい方がよみがえり

社長以下税吏へ二等兵で居る

フレンドもおらず見合にけちを

手を拭いて五分がながい昼のベル

花嫁の笑顔封じるように塗り

パー出れば鼻の先から冷えてくる 豊中市 林 夢虹

為残したことの多し仕舞い風呂

恋に呆けて秋を知らない間に過し

出世主義孤独の顔の人なりし

集魚灯の様に屋台の灯がともり

ニコヨンのヨンが屋台の耐となり

文明は悲しや 黒い雪が降り

観光バスの埃の中の牛と俺 鳥取県 鈴木村諷子

腰かけている椅子だけの男にて

白い雲ゆらゆら葱を洗ってる

子の声も聞え夕餉たのしそう

警察署新築

ブタ箱の一番乗りは誰じゃやら

酒だけは三役という平社員 大洲市 富木 健朗

世話女房型のガイドで旅楽し

嫁さおくれだけ集まったクラス会

大輪の菊を税吏もほめて去に

ビタミンは大根でよし山の幸

孫 誕生

葬式の片棒かつぐ子が生まれ 兵庫県 河原みのる

葱引きにいても噂の二つ三つ

柿空前の豊作 二句

御先祖を怨んで柿をもて余し

勿体ないもったいないと柿が落ち

台風の御見舞という依頼状

廻り持ちなど貧乏人はよし 竹原市 松井 可笑

金策のつきたところで十二月

年寄がいいわいいわと飲んでくれ

金借りに来て餅搗きの場に出合い

平和とは舗装工事の続く道 見島市 伊丹柳瓢子

見に来てる子に マッシュル を指図され

十年目結婚記念は外で飲み

口笛で帰るベタルに職があり



雑筆  
春秋

先生の  
「周辺雑感」から

紅原綺史朗

昨年のいま頃だったか、路郎先生が講談倶楽部の短文芸の選をされていたところのことを「周辺雑感」に書いておられたが、わたくしもその頃、詩と川柳で賞をもらったことがあったので本箱をひっくり返えしてみた。

昭和7年7月号(A列5号、四七四ページ・定価五十銭)の川柳は剣花坊選、俳句は鬼城選、短歌は晶子選で、拙作が入賞したのは兩情選の民謡だった。

同誌11月号の俳句は武田鷺塘選、短歌は信綱選、都々逸は兩情選、冠句は久佐太郎選、川柳は久良岐選となっている。そのころは伎ではなく岐を使っておられたようである。

生まれてはじめて川柳なるものを作り、はじめてその川柳で賞をもらったが、たった一回かぎりでもめてしまった。

正直に言って、処女作がすぐ入選したのに川柳からはすこしも抵抗を感じなかったのである。

路郎先生が同誌で川柳の選をさ



先輩とおだて勘定はまかしとき <small>石川 県</small>	前田百万石	靴磨き易者と替って夜になり	同
先輩に手を抜くことも教えられ	同	胃袋ががっくりさせて寝正月 <small>玉野市</small>	小谷 仙山
名も付けん先に保険屋二人も来	同	今更に感心するもお人好し	同
紙の雪おでこの汗にへばりつき	同	人生に夢あり靴を光らせる	同
病人と甘えておれぬ十二月 <small>貝塚市</small>	護川 梢月	損得を頭に世話のすきな人	同
他人様の噂で 退屈せず過し	同	若社長今日は手形を割つただけ <small>竹原市</small>	杉原 愛鳩
クリスマスツリーも出来て療養	同	保険屋になつて珍らしい人がくる	同
云いわけを聞いてやる程腹が出来	同	働いて食う身に多い定休日	同
イン <sup>ク</sup> ビ <sup>ー</sup> の記者も減つてる下り坂 <small>羽曳野市</small>	板倉天悟空	サボテンの鉢が並んだよい暮し	同
菊人形の帰りに疲れた目に野菊	同	社長直直の面接女秘書募集 <small>宇都部市</small>	岩原 箔川
綴り方に書かれますわと仲直り	同	宗旨まで聞いて採用してくれず	同
鉄筋のアパートへ出る泥の道	同	殿様の声がしそうな天守閣	同
墓標まで傾きかけたとは家運 <small>愛媛 県</small>	河本南牛史	栄転の影に女房のヒビがあり	同
肩衣は流すつもりで 質に入れ	同	百円をポケットに残し酔いさめる <small>熊本 市</small>	田口 麦彦
髭のあるままで満期後村に住み	同	失恋もアクシデントにするおとこ	同
勧誘の貯金満期の笑顔して	同	扶養家族のおかが揃っていること	同
三日月も柿もかくれる家が建ち <small>岸和田市</small>	内藤ささ子	全集も揃え切り売りする知識	同
台所灯けつぱなしの十二月	同	茶だ舞だデートだ和服いそがしく <small>大阪 市</small>	竹内花代子
ハイカーみな水間の秋へ埋もれ切り	同	十二月財布も穴があいて来た	同
暖冬がうれしくこわい十二月	同	印刷の門松もないお元旦	同
子を一人生めば瘠せると貰わされ <small>笠岡市</small>	高木 桃里	親も子も孫も教えて表彰状 <small>田辺市</small>	室井八九寸
ワンマンへみんな木偶の首に見え	同	親が感泣した入社も鉢巻し	同
遠縁の出世頭をみなたより	同	ハンカチの白さにみせる暮し向き	同

ヒゲそり後に…

●美容衛生剤G11}配合  
●アラントイン  
●水溶性ラノリン

**男性** 200円

アストリン

わわれあれあとにつづく者がいないこともたしかだが、それよりも現在の大家諸先生に作家としての熱意が往年ほどの気はくりに欠けていることもたしかであろう。まず挙げられることに、川柳一本で生活をしている大家が、何人か。

三十何年も前にこゝまで川柳が伸びていたのに現在はどうか。すこしさびしい気がするではないか。新聞、雑誌等の活字の世界へももっともっと進出していてもいいはずなのに、これはどうしたことか。

読んでいたのはそれより以前で、大正末期から昭和の始めだそうなのでもう三十五年もむかしのことになる。指を折つてみると先生の三十七、八才のころにあたるが、われわれの年令から考えるときが大川柳人であったことに敬服の念を深くするものである。



立食いをしても叱らぬ大晦日 <small>愛媛県</small>	竹田 きえ	もう帰るのかと病人目をあける	同
定年へ名刺乱用気味となり	同	迷惑は承知の上の土産なり	同
全快へどちら向いても恵方なり	同	泣き顔が好きとあなたは天邪鬼 <small>大和五条市</small>	同
肩で息することばかり十二月 <small>橋本市</small>	岸本 木魚	電化には遠いくらしの枝はたき	同
眼に見える物皆ほしい子供連れ	同	同権の世に花嫁の角かくし	同
本職はわが掌に滲み出る	同	パーマあてるブランを早うから女 <small>岸和田市</small>	田端くにを
正月がもうすぐ子等のいい返事 <small>竹原市</small>	山内 静水	信心を陰気なものにする他人	同
お父ちゃん貴男と上手にあやつも	同	二言目弁償します 悪い癖	同
割勘にする気どんどん運ばせる	同	軽石の肌が気になるクリンシン <small>大阪市</small>	米浪進之助
結婚の詐欺にもかからず除夜と <small>大阪市</small>	宮原 敏子	プレゼント誕生石へ淡い夢	同
井池で値切った分は皆奢り	同	パチンコへうちてしままん心意気	同
家具売場夢は大きくかけめぐり	同	嫁だけの準備が出来て縁がなし <small>滋賀県</small>	同
赤い羽根さけパチンコへ持つて行き <small>宇都市</small>	平田 実男	小金出来たそんな婆さん腕輪買う	同
赤字また消しに帰った里帰り	同	人形のように飾って馬で嫁き	同
悪友の方が慌てた妻のヒス	同	すぐ齢のことを云われる甲斐性 <small>西宮市</small>	同
ヒノマルに頼れず赤い旗をふり <small>愛媛県</small>	大垣たもつ	パチンコで気が落着いた十二月	同
湯たんぽを入れず満州産にされ	同	出世する秘訣本屋で売れ残り	同
情熱の花	同	見晴しのよい住宅で水がかれ <small>大洲市</small>	同
エリーゼが家出しそうな唄になり	同	部屋毎に灰皿おいて隠居住み	同
襟一つよう掛けぬ娘で赤い爪 <small>大阪市</small>	藤富 淀月	ねぎ二三本で遠い市場へ行く主婦	同
しきたりは初春から新らの割烹着	同	殺し屋にねらわれているよう寒さ <small>伊丹市</small>	同
正月がくるとさびしい未亡人	同	アルプスにとつつかれ死神に <small>ミツツカレ</small>	同
神仏までもけなして世をすねる <small>小松市</small>	村井 城南	好きな女喪服の似合う女	同

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴) 三〇円  
送料(二冊分) 八円

おられるか、ということである。  
本職に身心をすりへらし川柳をただの趣味程度で一社をもち、江戸時代の一国一城主然としたことな  
かれ主義だと喝破すれば暴言であ  
ろうか。

税金を川柳によって納める川柳  
人が、この短詩日本に一人か二人  
よりいないということがすでに、  
川柳も曲り角に來ていることを示  
しているのではないだろうか。

武士は食わねど高揚枝。こんな  
気がいが川柳大家にあってもいい  
のではないか。

さて、パンをふり出しへ戻し  
て、久良岐選の入選句をご披露す  
るとしよう。

題は「満蒙」「映画」「帝展」  
というのだった。一銭五厘のハガ  
キへ三句連記ということになって  
いたが、一等の賞金が五十円だっ  
たから、親子三人なら一カ月は食  
える金額である。

——以下原文のまま。

トーカーへ異人早目に笑い出し

(評) 外国語のトーカーは吾人  
には陳紛演紛(ちんぶんかんぶ



狙の音もジングルベルに乗り <small>美称市</small>	安平次弘道	浅学菲才役所に訪えばそり返り <small>兵庫県</small>	遠山 可住
まだ死ねぬ死ねぬと中風の不服	同	御視察の雨天順延松茸狩り	同
金のないのがいっつも同情してく <small>も</small>	同	合理化に身動き出来ぬ二十四時 <small>小松市</small>	筒井 吉枝
寝足らぬに一番バスの隙間風 <small>川西市</small>	佐伯 九紫	子のやんちゃストの斗士がも余し	同
カアちゃんのくびが出た <small>みた寝よ</small>	同	今日という今日はと古くきセリフ <small>大阪市</small>	西本 保夫
新婚へ飼育されなと飲み仲間	同	ボーナス期またまた婚姻期がし <small>も</small>	同
月賦済むころは寝押も忘れかけ <small>青森県</small>	木村 涼人	幸福に素通りされて年が暮れ <small>兵庫県</small>	齊藤たけお
スラックス良妻賢母型でなし	同	アメリカの子守歌でも子はねむり	同
神経痛雪はコンコンどこでなし	同	ベテランとおだてられるオールド <small>西宮市</small>	三上 芙路
芸術をいうてフリーになりたがり <small>堺市</small>	吉本 菁風	初恋のめぐり会い姪見逃がさず	同
資本家は逃げ口上をたんと持ち	同	パチンコに対かうと精気とり戻し <small>松江市</small>	田中 妖人
貴方の夢見たと迷わすことを云い	同	落葉ほろほろベッドへ見舞 <small>とて来た</small>	同
行商の帰りは米で重たそう <small>岡山県</small>	横山 一声	ゼスチャーの真似して母に御小遣 <small>大阪市</small>	萬代句念坊
給料日マダムは別な顔で笑み	同	河岸変えて見たが水面妻の顔	同
十二月けつまずいても振りむかず	同	お年玉孫に配って千鳥足 <small>須崎市</small>	高橋 蟠蛇
挨拶が嗜着の値踏み瞳と瞳でし <small>在久留米市</small>	宮藤 慈雨	迷うてもみたが土産はコケシにし	同
虫干に主婦は跨ぐもの多き	同	週刊誌丸めて遅い人を待ち <small>西宮市</small>	樋口 寿栄
コスモスが一杯咲いて行き止まり	同	菊活けて今日は女を意識する	同
低姿勢と云う音なしへ気が疲れ <small>下関市</small>	藤田 雪峰	夜ふかしもして恢復を試して見 <small>松江市</small>	藤井 章道
欲を出せ出せと成績子を叱り	同	手を握るのに手相など要らぬこと	同
ひとめふため今日男と遊ばぬ日	同	孫なれば許すピアノの騒音も <small>香川県</small>	三井 酔夢
休憩に毛糸編む手はニコヨンの <small>大阪市</small>	本村 文福	恋したか晶子抄など誦んじる	同
人波を僕もせかせか暮の街	同	屑米を食べても女よく太り <small>岡山県</small>	杉本たつよ

ん)しかしながら英語を解する青年又多き吟、外人の早目に笑ふ点新しい穿ちあり。  
女房が有っても林長二郎

(評) 長さんの人気は蓋し満蒙以上、長さんさようならと選者も曾つて帝劇菜屋口への見送りに混じりし事あり。  
大河内日本一の腕みやう

(対 秋)

(評) 久良岐を狂人又は変人奇人呼ばりする世に独り久良岐に共鳴せし者に故沢田正二郎あり、其門下の秀才大河内伝次郎又久良岐と相知る、故市川困十郎死後、腕の利く男は確に此男一人なり、江戸と現代との握手作者の着眼面白し。

「トーキー」の句は、当時無声映画から、声が出る映画になったころを詠んだものである。「女房が」は、ご存知長谷川一夫若かりしころの人氣をもものし、「大河

車

# 福壽の

心斎橋筋大丸前

電話の三三四番



やりくりのことだけ姑口を添え  
 沢庵の音快く食うも秋大阪府  
 やりくりの辛さを云えば鼻毛抜き  
 同 高橋 尚史

沖 縄

眼の前へ金つきつける残酷さ奈良市  
 詩の風を俺に吹かせてくれた君  
 同 内海 敬太

湯治にも秘書がいるのかなと思ひ笠岡市  
 同 松本 忠三

バッターゴッス社長光った靴で立ち  
 同 神田 豊年

いは一つ取れて思春期よく笑い宇都市  
 同 堤 勝三

口下手の誠意はつきり顔に出し  
 同 榎原 万女

お姑を百科辞典にする同居大阪市  
 同 榎原 万女

給料日ワンバンドして帰り  
 同 榎原 万女

四国路を行けば二度目の稲が出来岡山県  
 同 榎原 万女

阿波おどり習う土産へ汗をかき  
 同 森本黒天子

ものもちといわれしぶちんと河内長野市  
 同 森本黒天子

旅に出て豆腐喰いたい日がつつき  
 同 中川 利男

右です左ですと手袋を渡す妻羽生野市  
 同 中川 利男

百貨店へ入って妻にリードされ  
 同 世良 丘路

誤植多いぞと新聞代値切り愛媛県  
 同 世良 丘路

借金が済んだらつんと通りすぎ  
 同 菊池 白葩

百姓の眼にゴルフ場広すぎる山形県  
 同 菊池 白葩

暖冬異変軍衣で稼ぐ十二月  
 同 都倉 求女

サラリーマン賀状の版影東京都  
 同 都倉 求女

相談欄読みものとして読める幸  
 四面楚歌肉親そつと座をはずし笠岡市  
 柿の味竹馬の友が目目浮び  
 同 佐内 隆文

売掛けのことは云わずに初荷積む岡山県  
 同 福田 祥男

マッチ貰った同志抽籤場で笑い  
 同 野口卯之助

ビニールの財布かちかちして寒し宮崎市  
 同 野口卯之助

試食会この原料は何ですか  
 同 井上美恵子

ボーナスはスキーブイに乗って消え大阪府  
 同 井上美恵子

やりくり疲れ家計簿腹が立ち  
 同 小倉美音子

正装の妻に膳立て指図され倉敷市  
 同 小倉美音子

ライバルを先ず賞めてか荷を拡げ  
 同 末沢 花美

海の大きさにひとりいる不安西宮市  
 同 末沢 花美

悔いばかり書いて日記も十二月  
 同 井上 旭峯

フラッシュへ犯人良心あるらしい玉島市  
 同 井上 旭峯

夜業する妻のミシンも冬の音  
 同 飯野仙台子

迷子をさがす親あり捨子あり豊田市  
 同 飯野仙台子

恋人を撮るシャッターの軽い音  
 同 白石 由美

失恋へ女おんなを忘れかけ大阪市  
 同 白石 由美

マネン人形の着てた服着て逢と行き  
 同 吉田 俊和

世渡りの下手の男の釣上手錦西市  
 同 吉田 俊和

経験になったと損のたかが知れ  
 同 藤本 星二

寝呆けても財布はかたい小商人山口県  
 同 藤本 星二

余技たのし羽織の裏が出る座敷  
 同 藤本 星二

**味の七コ**  
 モダン 川柳  
 心齊橋大丸北の辻東へ  
**御門**  
 TEL 07 6684  
 御集会には階上御利用下さい

内一の句は、大河内伝次郎がヒドイ近視で、殺陣(たて)の撮影中はよほど注意しないと、斬られ役が怪我をするので、あんな目をするのだと、そのころ日活の大淵屋の人から聞いたことがある。

ことついでに、その入賞者を調べてみると、有名どころの雅号も見える。

新聞の通り褒めてる竹の台  
 (竜城)

この星野竜城という人には一度会ったことがある。二、三の雑誌の短誌型文学の選者だった。

国鉄職員で大阪から懸賞誌(一部十銭)を発刊する人が、その準備にわざわざ東京から竜城氏を招いたのである。川柳部の担当だったから、堀川蘇堂氏にもひきあわされた。わたくしは別の畠からゲス



美容体操孫のいるのもまじつとり 笠岡市 出原 真奇  
 婦人記者見る眼が肥えて踏み切<sup>ら</sup>ず 同 同 宮政 周防  
 産めよ殖やせよ領土<sup>はま</sup> 家せまし ハフイ 松本 利行  
 冬眠をする球根へこもを着せ 大坂市 近藤 昭夫  
 お隣りがテレビ買うたで騒ぎ出し 鳥取市 種谷 敏明  
 暖房までしてパチンコ屋よう出<sup>き</sup> 大坂市 坂上山椒坊  
 喜の祝過去の苦勞も楽しかり 布施市 岡崎 雪美  
 結局は見栄を張ってるテレビ族 松江市 鳥井 川鳥  
 詩に遠く牛と畑に鎌を振る 愛媛県 常岡 孝風  
 スト笑うように年の市活気づき 兵庫県 外村さだを  
 音楽を聞かしてコピー代倍もと<sup>り</sup> 大坂市 奥野 正一  
 あきまへん儲りまへんと自家用車 近江八幡市 南園わたる  
 ことづけの手紙のあて名気にか<sup>が</sup>り 布施市 高木 波柿  
 屋根職人へも贈賄が利くと知れ 笠岡市 野木三又路  
 鎌だこを遺跡とみつめ療養所 松江市 高木繁太郎  
 網棚に顔乗りそ<sup>う</sup>な八頭身 茨木市 村上 和楽  
 ポーナスを渡す工面に四苦八苦 大坂市 守屋良里子  
 大物が出て山里の名が知られ 笠岡市 谷本鈍愚坊  
 病臥しても達者と<sup>同</sup>じ年をと<sup>り</sup> 笠岡市 川村 山友  
 貧しきはポーナ<sup>ス</sup>貰<sup>つ</sup>て波が立ち 西宮市 山下 艶子  
 故郷の母夫が飲まぬを幸と云<sup>う</sup> 伊丹市 奥谷 弘朗  
 大売出しポーナ<sup>ス</sup>よりも先に<sup>く</sup>る 倉吉市 春田 鎮海  
 旅芸人東京弁でぐ<sup>ち</sup>りあい 布施市

払うもの払いポーナ<sup>ス</sup>ほつとする 松江<sup>市</sup> 岡崎 祥月  
 半分の胃で生き抜いて行かんとす 大坂<sup>市</sup> 西浜 青路  
 国訛り季節女中の顔でなし 西宮<sup>市</sup> 酒井 丹謡  
 踏切りの空で銘酒の赤ネオン 石川<sup>県</sup> 高山 清勝  
 せめてもの手助け晦日を孫と寝る 京都<sup>市</sup> 大久保 和三部  
 カスバ又無力で飯の食える<sup>と</sup>こ 大坂<sup>市</sup> 今西 生薑  
 オールドミス忘年会へ酔いつぶれ 今治<sup>市</sup> 越智 一水  
 何もかも揃えて嫁く順まだこ<sup>な</sup>い 石川<sup>県</sup> 斉藤 巖  
 不景気を云って易者の店をしめ 大坂<sup>市</sup> 中西兼治郎  
 被害者は杓下の儘署に呼ばれ 神戸<sup>市</sup> 吉田 隆史  
 遅々として癒えぬあせ<sup>り</sup>母も老い 貝塚<sup>市</sup> 杉本 一鶏  
 遠慮などすなと恐縮させてゆき 芦屋<sup>市</sup> 里田一十  
 延着の訳へつら<sup>ら</sup>を下<sup>げ</sup>て 汽車 金沢<sup>市</sup> 山本 木象  
 ロッキード叩き叩けば安<sup>く</sup>なり 笠岡<sup>市</sup> 大内 尉介  
 体験談一位入選貯めてい<sup>ず</sup> 七尾<sup>市</sup> 松高 秀峰  
 水枕してまで酒を飲む<sup>つ</sup>もり 小松<sup>市</sup> 月田北海坊  
 親戚は長いお経を難儀が<sup>り</sup> 鳥取<sup>県</sup> 龜崎 漫歩  
 赤い羽根つけて退院挨拶し 茨木<sup>市</sup> 米倉 義雄  
 鐘一つ突いて観光バスは去<sup>に</sup> 大坂<sup>市</sup> 古川 鶴声  
 ポーナ<sup>ス</sup>へ蝸の足ほど手を伸ばし 堺<sup>市</sup> 武田軍治郎

本号も相当多く全没者をみました。全没にくじけては  
 なりません。たった一句でも栄光の一句へ折角のご健吟  
 を祈ります。  
 編集部

トとして招かれたものである。  
 満州の赤い夕陽へ鎌をとり (東洋鬼)  
 三条東洋樹氏である。当時は満  
 蒙ブームで開拓義勇団といった面  
 々がぞくぞく渡満して、日本敗戦  
 の種を蒔きに行つたものである。  
 川柳のことは門外漢だったが、  
 映画という題にしては長二郎がど  
 うの、大河内がどうのというスケ  
 ールが小さすぎたその選に失望も  
 し、楽屋で会つたとか、友人だっ  
 たとかいう選評の個人的なつな  
 がりにも不満なものがあつてそれ  
 が、路郎選でなかつたことが私の  
 川柳三十年の立ち遅れとなつたよ  
 うである。

ウロコ印  
  
 武田薬品  
 ★総合新感賞錠  
 かいざい  
  
 二五錠 一五〇円  
 五五錠 三〇〇円  
 大坂市 武田薬品



飲む時はこんなクレンジングになるのです。没食子、カネ女さんご夫婦です。

# 川柳夫婦善哉

(二) 没食子とカネ女

訪問者 丸尾潮花

る。どうやら落ち  
ついたところで先  
ず第一矢は、  
若いのになに  
ずこつちも妻を

の作家没食子さんへ、没食子さん  
は有名な愛妻家だと噂に聞いてい  
ますがとお伺いすると、奥さんの  
方からすかさず

「本当なんですよ。こんないい  
主人は金のわらじを履いて探して  
もありません」と奥さんの言葉  
も甘いものである。

「家はね。他所さまと違いまし  
て何でも逆なんです。家の中の  
片付け物一切も主人がして呉れや  
はりますね。私がこんな仕事をし  
ているせいでもありませんけど、自  
然とそうなるんでしょうね。片付  
けて呉れやするのはよろしいので  
すけど何でも突込んでしまやはり  
ますので、何をどこへ入れて呉や  
はったのか一寸もわからしなへん  
ので其の度に病院へ電話をかけて

冷たい夜風に乗って、ブンと白  
粉の匂いがしそうな此処今里新地  
の置屋街。没食子さんのお宅を探  
し当てたのは二十時を少し廻って  
いた。すでに晩酌をきこしめした  
没食子さんや奥さんのカネ女さん  
とに笑顔で迎えられた。不朽洞会  
特別会員没食子さんは、大阪通信  
病院から淀の通信病院に転任され  
葉局長として永年その手腕を見せ  
ていられる。カネ女さんは家庭に  
あって和裁師として二男一女のい  
いお母様でいられ、川柳婦人友の  
会の会員である。白い汚れ目のな  
いエプロン、健康そのものよう  
な明るい笑顔。年の瀬が押し詰り  
ますと奥さんのお仕事も大変でし  
ようね」「ええもう坐った切りな  
んですよ」とおっしゃりながら、  
お二人で座蒲団をすすめて下さ

尋ねますねん。けど、本人さんもあ  
まり突込み過ぎてわからない事が  
度々おますね」「そうやね」と此  
処で没食子さんが口をはさまれ  
る。「僕は何でも彼でも突込んで  
しまふ癖があるんや。それで僕に  
も突込んだところがわからへんね。  
この間もな。或る人から書を買ろ  
たんやけど、何は探してもわから  
へんね。貰うた人に悪うてな。も  
う表装出来たかと聞かれる度に穴  
があつたら入りたいたい位いや。まだ  
表装中や言うて嘘ついてるねけど  
早よ探さないかん思うて苦勞して  
るんや。ほんまにあかんわ」困っ  
たこつちやと顔をなでながら、奥  
さんと二人が声をたてて笑われ  
る。

「没食子さんの句にはお酒を詠  
まれた句が多いようですね。  
湯たんぼで火傷する程酔  
いしれて  
酔さます薬も毎日買おて  
おく  
耐焼けの首筋子にも嫌が

られ  
酔眼に映る名月いびつな  
り  
湯豆腐で妻が縫うてるそ  
ばで呑み  
など拾って見ましたが、おしま  
いの湯豆腐の句は実感らしいです  
が」「実感や、家内が仕事場の断  
ち台の前で縫うている。そばで壁  
にもたれて顔を見ながら独酌でチ  
ビリ、チビリ呑むねん。まあ仕事  
場も見といて貰らおか」と座を立  
って奥さんの仕事場を見せて下さ  
る。

床の間には没食子さんらしく瓢  
箆が立てかけてある。断ち台の上  
にはナイロンの丹前生地が突然の  
訪問客のために置き去られたよう  
に見える。ナイロンは、ヘラもア  
イロンもきかしまへんで困りま  
すねと不平をちよつびりと口にさ  
れる。元の座に戻ったところで、  
光輪さんのカメラが時はよしと、  
パチリとシャッターを切つて仲の  
良いお二人をお納めてしまった。

「奥さんが縫うていられるそばで  
呑んで居られると咽喉のつまる思  
いがしやしまへんか」「そうやか  
ら僕にこんな句もあるね、  
銀婚の今もなお妻の手内  
職

もう銀婚は遠に過ぎてるけれど  
な、済まんとは思うてくれど苦  
しい時はな」と声を落してうまく  
逃げられた。「奥さんが作句を初  
められたのは、たしか通信病院の  
鳥ヶ辻に投句をされたのが初めの  
ように思いますが」「出したり出  
さんんだりでした。本当に作句を  
して見ようと思いましたが友の  
会に入れて頂いてからです。潮花  
さんが先生見たいなものです」と  
御夫妻お揃いでお上手を言っ  
て下さる。

「奥さんの句の中に、  
家出する覚悟に親の方が  
折れ  
と言うのが有りましたが、あれは  
お作りになったのでしようね」  
「実感ですね、私のところは若い  
お針娘の方がたくさん来ていら  
るので、話の中から拾いまんね。  
それでもすぐノットして置かない  
と忘れてしまいますやろ。私の句  
にね、  
夫には内しよで妻は溜め  
ている

と言う句がありますがこれも実感  
ですね」とクスクス笑っていら  
れる。「では御主人に内密で」「隠  
し場所は言えませんが」「とハ  
ツヤリと言つて又笑つてしまわれ

る。「奥さんには何か別にご趣味がおありですか」「趣味と言いましても仕事の仕事でし、強いて言えばお裁が趣味でしょうか。好きと怒とで、お嫁に来る時もお弟子さんと一緒に連れて来た位です。から、それと絵が好きです。歳を取ったら静かに絵のおいこでもしたいと思っています。何でも静かなものを好みますので、景色がいいとか、悪いとかは別として郊外が好きです。盛り場のような賑かなところは行きたいとも思いませんね」

「奥さんの生れられたのは」「奈良県ですけど、それは生れただけで大阪に来ました。主人とは近所に生んでいたようです」「では恋愛結婚ですか」「いいえ、住んでいましたのは近所らしいのですが少しも私は知りませんし、見合なんです。それも昔のお見合です、私は眼が近いものですか、お見合の時は主人の顔もよく見ずしてね。結婚式の時初めて見ましてね。何と頭の毛の薄い人やろと思てビックリしましたが花嫁衣裳をつけているでしょう。あとの祭りであきらめました」と笑いで、い乍ら遠い昔を思い出しておられる。「没食子さんは川柳家の二十四時間アルコールの力を借りないと眠れないとか、書いていられたましたが、毎晩どの位の量を呑まれるんですか。」「一本やな。たまに寝る前に又一本呑むことがあるのと、おいしいお魚の時はな。まあ月にして三本の月と四本の月とや」「それ位でしたら多い方でもないですね」「ええ、

そして呑みやはりますと機嫌のええお酒ですね」と又奥さんから甘い言葉に耳にする。「お酒はええお酒ですけど寝たらひどいイビキです。高ーの子供が耳栓を買って呉れな寝られへん言うたりしますね。そや、ニッコ笑いながら今夜も機嫌のいい顔で話を一つづつ下さる。「先月生々庵先生と小石さんをお訪ねしましたが先生は書道を書いていられるように聞きまして。あれだけ上手に書けるのに」「僕も実は去年の八月から書道の支部長にされてし、永田鶴風先生に習ってらね。今二級や、もう四階段上らんと初段にはなれへんね。毎晩一時間位書いてるんやけど一向上手にならへん。嘘八百と言うけど一本八百円もする筆を心斎橋の竹翠で買うて書いてんのにあか思て。一杯呑んで書くさかやろ思てんわ。」「でも路郎先生は呑みやほらんと生きた字が書けんと常に言うてはりますけど」「そや、あないならんと字はあかんね。僕も三年したから呑まして貰うて短冊書いてるようになら思てんわ、けど僕は何をしてもあかんわ」「謡曲も二年ほど習やはりましたな」と奥さんが笑いながら口をはさまれる。「謡曲をやると腹から声を出すので健康になると言いますけど」「それが僕のは腹からちつとも出んとかばっかりやね。」「まあ書道をやつて呉れやはる方が静かでご近所も喜びはります」と奥さんはじめの傲しい言葉である。

苦勞とは思いませんと縫

- ★川雑 2月の会
- 淀川句会 2日(火) 六時
  - 声・駅前・気まぐれ 十三西之町五丁目
  - 東淀川郵便局
  - 倉敷句会 7日(日) 一時
  - 酌・片エクボ・けちんぼ・眼くばせ・刺勘
  - 倉敷市水島弥生町四ノ三二 榎原一善居
  - 米子句会 7日(日) 一時
  - 長靴・親心・左きき
  - 西伯町役場会議室
  - 玉造句会 10日(水) 七時
  - 悪趣味・専用・うぬ惚れ
  - 市電玉造南百米大阪信用金庫
  - 富柳句会 13日(土) 六時半
  - 恋人・電報・夢
  - 富田林市役所
  - 小松句会 13日(土) 七時
  - 食堂・独身・先生
  - 小松市日出町日の出湯二階
  - 明和研究会

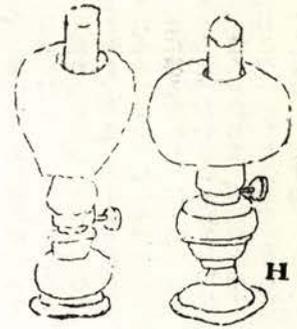
- 14日(日) 一時 喜劇・橋・椿
- 西宮市鳴尾町
- 新明和興業KK和室
- 京都句会 16日(火) 夕
- 動悸・礼賛・霰
- 四条繩手 仲源寺
- 阿倍野句会 17日(水) 六時
- サイズ・甘酒・意地
- 旭町二丁目 金塚会館
- 西宮句会 19日(金) 六時
- 曲る人妻・ストロブ
- 阪神西宮駅北出口スグ 労働会館
- にしり句会 21日(日) 六時
- 世直し・機嫌・端役
- 玉出新町通一ノ一 (南和園) 後藤梅志居
- 堺句会 22日(月) 六時半
- 会釈・問題・処女
- 九間町山ノ口 八木摩太郎居
- 南海電鉄句会 25日(木) 六時
- 支線・ほんち・心付け
- 難波高架下 親和クラブ
- 備前句会 未定
- 出張・前触れ・吹き我慢・お揃い
- 横山一声居
- 弓削句会 月末/切
- 勇退・赤ちゃん・女学生・針
- 久米郡久米南町下弓削四五四
- 真原七面山居

西独クノール社より新輸入

# 神経痛・リウマチに...

オサドリン錠

オサドリン錠は西独クノール社が多年研究の結果、新発見した神経痛・リウマチ治療剤です。その作用は確実に胃腸障害などの心配がありません。(10錠) 350円・(20錠) 650円



# かちまけ

— 沖繩戦史を讀んで —

戸田古方

ゴツダマの眼に強い鳥弱  
い虫

この世に生存競争があるかぎり、強いものが勝ち、弱いものが負けるのが世の習いというのでしよう。

この勝ち負けはこの地上のさだめなんでしょうが、そのあり方は種々さまざまで、こどもや野蠻人のケンカに見るような規模も小さく単純なものから、ふだん紳士面をしている文明人の原水爆をもち出す超大量殺人まで数かぎりもなく種類があるのであります。

沖繩の戦いは広島長崎へ原爆のおちるすぐ前のことであります。が、今まで読んだ多くのものからうける印象では全くの混戦で、秩序のある戦いなんかなかったように思っています。この沖繩戦史はこの戦いが太平洋戦争中の最大の激戦で米軍一万五千、日本軍十一万の生命をうばったこと。末尾の年表によりますと昭和二十三年の三月末から六月末にわたる

三カ月間戦われ、主な陣地であつた沖繩の旧都首里が陥る五月末までは日本軍もなかなか見事な戦いぶりをしていふことを、こまかく描いてあります。その五月末には失敗に終わったといえ、大規模な総攻撃さえしています。この島におつた日本軍は五、六万であつたようですが、現地召集や学徒まで動員して十万以上にはなつていたでしょう。これに対して米軍は、

これ又末尾の統計によりますと十七万となつています。人の数は七万とありますが、無援孤立、すつかりとりかこまれていたのと三百万トン以上の物資をつぎこむ相手としては、日本軍の伝統であつた攻勢防禦はできそうでなく、三月末より四月にかけて米軍は全く無血で上陸し日本軍のいわゆる沖繩要塞の線にぶつかつて、戦いがはじまりました。米軍の海上補給や包囲陣をつきこすために神風特攻攻撃はくりかえされ、世界にはこの戦艦大和の最後もこの間のこと

でした。

負けた日本の犠牲もさることながら、勝つた米軍の出血は実におびただしく、原爆以前に於ける地上最大の戦斗ということばはむしろ米軍側によつてつかわれたのでした。

勝ち目のない戦に玉碎したといえ、その頃の作戦としてはよくその目的を達したものであつたことがわかります。敗けてしまつたあとから考えると全く無駄なことだつた、犬死だつたといわざるをえません。序文の中に早大総長大浜信泉氏がのべられているように「読む人に再びこのような過ちを犯すまじの決意をうながし、人類の恒久的平和への道標ともなるであらう」ことはこの本の世に出た所以でもあるでしょう。

著者の上地一史氏は執筆者の代表でありまして、名をつらねている五人の方々はいずれも報導陣その他で現にこの島で活動しており、戦争をこの島で体験している

のであります。書名の「沖繩戦史」も公報のようにも思わせませんが、専門家以外にはよくわからないうようなものでなく、公報並みの正確さとくわしさをもちながら読みものとして、誰でも引きつけうる書き方がしてあります。最近の週刊朝日の書評でもこの本をとりあげておりますが、例の女学生「ひめゆり部隊」のことなども、書いてある分量は短けれども力がこもり、文学的であらうです。

全体を通して坦々とかかれており、日本びいきでもなければアメリカびいきでもない、まるで野球解説の小西節でもきいているように、あとあじのわるそうなこの本をそうはしていないのであります。

妙な本をとりあげて、軍国調の復活を謳歌しているんじゃないかと思われるかもしれないが、この本のたんたんとした書き方の中から、本文の表題「かちまけ」を考えてみたくなりました。

私のきらいものに「にわとり」と「スポーツ」があります。「にわとり」については又のことにして、「スポーツ」ですが、「スポーツ」だけでなく室内のゲームだつてすきじゃありません。肉体的にも精神的にも機敏さを欠いていふ私は何をしてもよく負けました。しまいは私がひいきにしたり、応援したりするときと負けるといふ迷信さえ飛び出して来て、ま

すすす、私のスポーツきらいを強めるのでした。

何のことはない負けるからきらいで勝つたらすきになつたのかもありません。勝負が必からきらいなら、現にこんな戦史なんか読まないはずで、この間も

戦争の本はスラスラ読みなし

などという句も作っています。人一倍負けん気が強くて、勝ちたい一心なのかもしれません。

海軍省貸下軍艦マーチ唄

いたし

戦争中の句ですが、白波けたた軍艦のすんぐりした型体美や勇壮美に喝采したり、少年時代谷洗馬という馬の面伯の描いた戦争面をあつめてよろこんだのも、直接「かちまけ」に関係がなかつたからであつたのでしよう。それか、勝つてそんなものだけに力が入り、すきになれるのでした。

生活技術ということがありますが、それは上手に生きる方法というのであります。大願成就の方法などということも、大いに勝ちぬくことをすすめているのであります。

学校の勉強だつてやはりそのほかにあるものではあります。ことに大ぜいがいっしょに学ぶことはひとりて学ぶよりはるかに成績が上り、能率的であります。競争をするからであります。純粋に人類の幸福を考えるとき、こうした競争ははたして正しい、すす

めるべきものかどうか疑わしいのであります。競争である以上、かちまけが出来、まけたものを傷けないとはいかないからであります。

最近の教育の考えかたからいいますと、目標達成は奨励せらるべきかはしませんが、出世主義は排撃されています。実際、競争相手にとりまかれることによって、指導者の指導に特別に神経を集中する結果、目標も達成され、成功もし、俗世間的には出世のきずなともなるのであります。競争ということにも多分にそんな意味がふくまれています。しかし理想からいえば成績序列など作らないのがよいのでしようが、熱心の度合に比例して自然、序列を知りたがる熱意が強くなるのであります。

基敵はにくさにもくしなつかしし  
という古句がありますが、仲のよい二人であっても基敵はカタキにちがいありません。

スポーツマンシップとかフライン・プレーといい、無理な勝ち方は排斥されるべきものとしています。ことにイギリス人などは勝負を考えないといわれていますが、訓練によって、そうは馴されていなくても、何か不自然な感じがしないでもありません。ことにプロのスポーツマンは勝敗が直ちに生活にひびいて来ますのでなお不自然さが目立つような気がします。スポーツの利点は人間能力の限界の

向上を目的とし、終れば仲よしかえって、敵味方とも相手の行績をほめたたえる、そこにスポーツの醍醐味があるといえます。相手なしに只能力を記録する場合も、その場に相手がないというだけで、勝つための行為であることには変わりありません。展覧会やコンクール、川柳、俳句、短歌の会合によって選に上ったものと没になったものが区別されませんが、相手と向き合っていないというだけであります。

私はこういう平和的な「かちまけ」と喧嘩や戦争とどう区別してよいのか考えてみたいのであります。五十五年前の日露戦争の旅順開城後、乃木將軍とステッセルが水師營での会見はどうやら試合のすんだあとの両チームといった感じがするのであります。勝てば官軍ということばのある一方、戦時国際公法というルールがちゃんとなるのです。又、国と国との戦争の場合には個人同志は案外、師弟や友人の關係にあるものが敵味方にわかれたりすらするのであります。太平洋戦争の南方軍司令官の寺内元帥の一家と、当面の敵、英国司令官マウントバッテン元帥の一家とは非常に仲よくしていたとか、日露戦争の旅順艦隊の司令官マカロフは戦死しましたが、彼を死なせた日本艦隊には当時第一級の戦術家であった彼の弟子が多数に居たという事です。

- 映画本論をよんでいますと劇的境遇についての三十六の形式が上っています。
- 一 欺瞞 二 救済
- 三 復讐に迫られる罪
- 四 肉親間の復讐
- 五 追跡 六 災難
- 七 残酷、又は不運の餌食となる
- 八 反抗
- 九 大胆なる企図
- 十 誘拐 十一 謎
- 十二 獲得
- 十三 肉親の憎悪
- 十四 肉親の争い
- 十五 殺人の姦通
- 十六 精神錯乱
- 十七 致命的軽率
- 十八 知らずして犯した愛欲の罪
- 十九 知らずして犯した肉親殺し
- 二十 理想のための自己犠牲
- 二十一 肉親のための自己犠牲
- 二十二 愛のためにすべてを犠牲にする
- 二十三 愛する者をやむを得ず犠牲にする
- 二十四 優者と劣者の争い
- 二十五 姦通
- 二十六 愛欲の罪
- 二十七 愛するものの不名誉を知る
- 二十八 愛の障害
- 二十九 敵を愛す
- 三十 野望
- 三十一 神と戦う
- 三十二 誤れる嫉妬
- 三十三 誤れる判断

三十四 悔恨  
三十五 失われた者の発見  
三十六 愛するものを失う  
西洋人の分析ですので、小うるさいところがありますが、芝居の筋になりそうなものがならんでいます。そして、全部がそうともいえませんが、勝ちたい、あるいは自分を優位におきたいというようなことにみんな入ってしまいうです。さらに劇的斗争の分析として、対自然、対環境、対人物、対道徳律、対法律、社会の制度規約というようなことが上っていますが、いずれも「かちまけ」に關係のあることはかりで、人間を考え、人間陶冶を志すわれわれ川柳人も参考にして考えてみたいことばかりです。

川柳は目先の笑いだけを目標にせず、大きく社会を人生を批判して、より幸せな人生を迎えるのに役立てなければなりません。したがって、「自惚れ」とか「負け惜しみ」とか「あまのじゃく」というようなこともみなこの「かちまけ」に入ってしまうのです。そう考えてくるとほんとうの平和とは何かと考えてくると、「かちまけ」のない世界だとはどうもいきれない気がするのです。一切の「かちまけ」を追放してしまつたら人間に何が残るのでしよう。プラスとマイナスを考えてみて、少くとも相手を傷つけることは少ない、あるいは傷つけることのないという条件付きの「かちまけ」はみとめざるを得ないということになります。修養というのはその限界を最も有効に判断する技術をみにつけるものなのでしようか。しかし「かちまけ」は少し油断をすれば大量殺人にも移行行く危険をいつももっているものだし、又その奥には踊り喰いふと地獄絵を思ひ出すという恐ろしいエゴイズムに通じていることを片時も忘れてはならないのです。

**草の千草野**

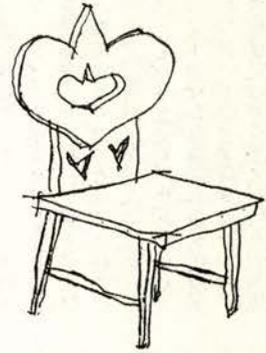
**料理教室**

会員募集

大阪クッキング スタジオ

堺筋本町二丁目南50米西側

ユニオン洋装店階上 TEL(25)4943



# 當節

## 三題ばなし

東野大八

### 魚

四国の友人から無造作にハトロ紙をぐるぐる巻にした小包みが届いた。ハテ、何んでしよう、ものを頂くといつもご機嫌のうちの奥さんが、ゴツゴツする重いその手ざわりを楽しみながらつづがやいた。

「多分忘れてきたスリッパにでも気がついたんだろうよ」  
とこちらは冷やかした。何はともあれと解いてみると、なんとそれは手の平ほどの薄っぺらな魚の干物だった。

「アラおかし、このお魚、片つぼの頭に眼が二つ集って、裏側の方はまっしろ」  
「ほんとにスリッパみたいなおサカナネ」

「これカレイというのよ」  
とうちの奥さん。カレイじゃなくてヒラメだろうと私。

カレイかヒラメか、とにかく潮の香のするそいつを炭火にのせて

カリカリするところで一パイ。香ばしい塩気に快よいその歯応え、山郷のまずい干鮎の比ではない。

「左ヒラメの右カレイっていう言葉があつてね。その二つ眼の片より方にそれら二つの魚の特徴があるんだよ。ところがね、いずれも幼魚のときは人並に両側へマトモな眼玉をもっている。成長するに随ってそれが片側に片よっていつてヒラメとなり、カレイとなる」

「まるで日本社会党ね」  
とうちのおばはん。まさか西尾さんがカレイだなんて失礼な、と言いかけたら末の子が

「それはちがうよ、チチやハハの言いつけを守らず、その上、イヤな目で両親をにらみつけたんでそれ以来おメメが片つっ方の顔へよつちやつたのよ、カアちゃんがそういったことあるくせに」

「それにしてもさ、おなかは至って白いじゃないの」  
とまん中の子。

「要するにハラには何んにもな

いけれど、眼だけ変な風に片側へ集つてる、それは社会党じゃなくて自民党じゃないの」

さすがは中学生の長女、おっしゃることがちがう。いずれにしても考え様、親方一つで二大政党のいずれにもなりうるってことの発見は大きい、成程ナルホドとこちらさん、ぐんと酒の味が出てきたねエ。

### 鳥

「いい山料理に御案内しましう」と晩秋の一日、タクシーで四時間もゆられさる山のてっぺんにつき、一軒の山小屋へ一同ゾロゾロ。

みると大イロリのふちに裸の小鳥が山の様に積んである。酒が出てカンカンの炭火の熱いイロリべたへ、竹串に刺されたストリップの小鳥が目白押しに並ぶ。ジュージューと、えもいわれぬ好ばしい香りが立ちやがて胃袋が躍動開始。

「どうも昨今、密猟が多くて困

るんですよ」

と県土木出張所長。

「取締りに乗出したいんだがこう山の上では盛り場のように手が回らんからな」  
と警察署長。

「さりとて協同組合には予備費もないしね」  
と県議会議員どの。

「ところでこの鳥はなんという鳥ですか」  
とさる新聞社の支局長。

「今どきの鳥のシユンはツグミに止めをさしますんですがね」  
と眼を伏せて県事務所長。

「ですが、こいつは天下の保護鳥でしたな」その言葉に誰かがアッハッハッとタンだらけの大口をあけて笑った。

「その味がこれとそっくりと思やあまちがいありませんな」

「味は同じでも名前はちがうんですよ」とテレてはいれど大まじめな顔の焼いているオツさん。

「六月の解禁前によく白ハエというのが料亭で出る。お便所をすませて表へ出てから、ハハアあれは正しくアユだったんだあとと合点がいくのが食通のエチケツトであり、サトリというもんなんだねエ」  
と家は旅館業の市会議長さん。

「さすればこれは山バエか」と保守党県議。それに独り笑えぬ警察署長の手の下で鳥も切なく焼けていた。

「おい、好き焼かい、寒いときは此奴が一番だ、有難う有難う」

「喜んで頂いてわたしもうれしいよ、ちゃんとお酒も用意してあるからね、すぐお着替えなさいませよ」

「ああ、そうしよう、御用おさめも今日で、これで正月を待つばかりさ、どっこいしょ、受け皿は此奴だな、では早速食べごろのこの辺から頂こうか」

「さあ、お酒もついたらわ」

「イヤに、手回しがいいが、これも岩戸景氣のポーナスのせいかね」

「まあそんなところネ」

「ああ、うめえ」  
「どうぞたんとお召上りになつて」

「うん、外の肉より内の膳ってね、そいつがうちのシモ降りとは有難い。もぐ、もぐ、もぐ」

「あなた——おいしい！」  
「うん、うめえ。ところでどうしたい、お前はネギヤトーフばかり上げててしかも口にしねえじゃないか」

「あなた！」  
「なんだい、改まって」  
「野火って映画観た」

「ああ、みたよ、すごい映画だねエありや、飢餓線上の人間が戦友を殺してお前、その肉を食うって奴さ、あれだろ」

「まさにその通り、ところでこの肉の味はどう？」  
「どうって？」

### 獣

「うまいの、ますいのどうなのさ」

「……？」

「なんて顔すんのよ、あんたの一番大好きなあおの肉じゃあないの、さっきから随分召し上ったお肉、ホラみんなあすこに近い肉」

「……？」

「太ももの、つるつるしたあおつけ根のあたりの白いとこ」

「？ ？ ？」

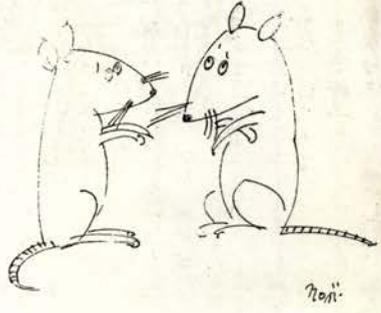
「ホホホ、なんて顔すんの、あんたがずっと前から開っていた、あすこの街のあの娘の肉」

「ホッほんとうか、それは……」

「震えてんのね、まさにおになつて……。なぜそうがたが口をつりあげてびっくりしてんのさ、足りなきあ、いくらでも押入れにあるよ、畜生、あんたのあいつの、一番あんたのすきなところもこのナべん中でとっくのむかしから煮えてるんだよ」

「キーンッ」

作者註ですが、むかしこんな実話が大連だかにあったそうです。年末、年始、冬の味覚のすき焼シーズンにこんなシバイで、浮気者の、ご亭主の心胆を寒からしめて女の復讐の勝利の一端とされてはいかがかとーもっともコトは少々エグツなさはいなめませんが、ケモノじみてる当節の風潮からしてヒユも万事こまでこなくて身に恥えんのじゃあないですかね、男って奴、女ってえ奴のその不逞さ。



### わが輩は鼠である

★ 傍島静馬

わが輩はネズミである。住居は隣りの納屋の隅を無断で拝借している。本来なればわが同族とも云うべきこの家に居を構えるべきだが、何分にもこの主ときたら、至って清潔家で綺麗好きだから、いつもごみごみした所に住み慣れているわが輩には安住の場所とは云えないのである。で、やむなく失礼だが子沢山で夫婦とも甚だしいズな隣家に腰を据え機を狙ってはこの家へ食物を漁りに来るのである。ところが、この家族達も主同様綺麗好きで掃除好きときいてからやり切れない。家具調度の類はきちんと整理がしてあるし、

いつ行っても座敷に塵一つ落ちていない、殊に台所廻りなどはとても清潔で、われらネズミ族やわれらの大敵猫族を極度に警戒して、戸棚の締りは嚴重だし、残飯や残菜などそこいらに放置してあるのをあまり見かけたことがない。それでも偶には米粒や果物の皮の一片ぐらいい有りつくことはあるが、この程度では到底わが貪婪な胃の腑を満足させることは出来ないのである。

この主は仕事には熱心な方だがあまりにも気が多過ぎていずれも中途で挫折してしまふ癖がある。熱し易く冷め易いと云うのか、こんな性質の人間にあまり大感したことを聞かない。

趣味についても、若いときには一応何んでもやったらしいが、どれもこれもちよい噛りでこれといって物にしたものが無いというのだから聊かあきれている次第だ。ところが、六年前不図した機会からやり出した川柳だけは全く別らしく、飽きるどころか益々熱心に続けているのはちよっと不思議なくらいである。だが難を云えばこの主、どうも生れつき脳が弱いらしく熱心な割に未だに会心の名句を物したことが無いのは少少気の毒な思いがするのである。今年わが輩もこの家の主も廻り年に当る。暦の上の運勢は兎に角としておたがいに最良の年でありたいものだ。そしてこの主の川柳に

も一大傑作の生れんことを切望して止まない次第である。

### 樋口舟遊

子年生れの一代守本尊は千手観音菩薩、天稟の性質は器用の質にて心高天寿の福音を享け相応の財産家となることが出来ると曆にあります。しかし人間はそれぞれ生活の環境によりまして多少の違いはありますが大体において同じ性質を持ちまんなら嘘でもないでしょう。白鼠番頭忠八といえは白子屋駒子との恋物語、雪舟の涙で画いた鼠、仙台秋の松前鉄之助の台詞に「きりきり立ち去れこの溝鼠」は皆縁もよく御存じでしょう。

酒 清

灘・魚崎

大塚合名会社釀

う。新兵時代(松山陸軍航空隊)のある日隊内の鼠を一掃の為に鼠取りを民家に借りに行く命令を受けました。お城に夕陽が映えて

南国特有の美しさでありました。衛門を出ました私等はとっぷりと暮れた頃に目的地の戸を叩きました。先に連絡があったと見えてすぐ女が出て来ました。「これ鼠取りの餌にして下さいネ御苦労様」と籠と温たかい薩摩芋の天ぶらを添えて出しました。新兵の空腹は兵隊なら誰も知っていたらう。外に出た私は思わず腹の虫が鳴り出す一失敬、上官らしい足音に驚き喉につめて目を白黒、しかし戦友だったのではと黒、しかし後には云うまでもない二人で全部喰へ鼠の上前をはねたのは生れて始めてでありました。先きに述べたように子年はこつこつと忠実に働く努力家でありました。強い信念があつて大人しくて人に好かれる果報者といわれています。しかし親切すぎて女の苦勞をする様です。特に嫁取には是非ともお進めいたします。たとえ溝鼠にしても毎日を働き自分の食物を捜しますから食う事に苦勞はしないそうです。以上鼠について些か自慢になりましたが廿日鼠とモルモットを除いては可愛気の無い動物で寧ろ人間に邪魔になります。しかし卵を盗んで運ぶ時の知恵とあの健固な壁も喰い破る努力と根気は路郎師の常に云われる人間陶冶の詩川柳作句に大いに学ばべき物があると存じます。

(年木の御栗身配は兵庫県下が特にヒドクそのため静馬氏と舟遊氏の原稿が新年号の欄集にまじらわったことをお断り申しあげておきます)

# 絵と川柳で表現する歴史

戸田古方

## ③ ギリシアの世界

つています。平和なときのギリシアは土地の關係からこまかくわかれ、お山の大将をみ

## BC 700~500 ギリシアの世界 分立



おそいかかるベルシアのラ イオンにギリシアの戦士たち が槍の穂先をそろえて立ち向

し、エジプトとミノポタミアの影響で生れたエーゲ文明はギリシアの土地で立派な花をさかせます。そして、ベルシ

アとの戦も無事にすぎると、いよいよ、ギリシアの黄金時代です。そしてアレキサンダー大王の統一まで数百年間、アテナだ、スパルタだ、テーベだ、マケドニアだと、本来の争いをいつはてるともな

く、つづけているのでした。

○ オリンピック原子がはねておどり出す  
女みなアフロジットの顔でいる  
マラソンの勝利聴き手も死にそらだ

○ プラトンは社会の円周率にふれ

## 特別課題「学生」麻生路郎選

(〆切・四月末日本社着便裏面に支部名雅号明記)

優勝楯に挑む川柳コンクール

## 川柳まつり

日時 5月15日(日)午後一時  
会場 宝塚阪急旅行会館  
(阪急宝塚駅下車・宝塚撮影所隣り)  
・宝塚市宮ノ下 電話宝塚四二二一番

柳話  
兼題  
「温 額」(二句) 麻生路郎選  
「洋 酒」(三句) 北川春巢選  
「団 体」(三句) 清水白柳選  
「おしゃべり」(三句) 須崎豆秋選  
「素つ破抜き」(三句) 若本多久志選  
「自 信」(三句) 後藤梅志選  
(各題別紙・裏面に雅号明記四月末日  
本社着便のこと)

席題 当日 二題発表(各題三句)  
★特別課題「学生」発表 麻生路郎選  
呈賞 ★各題天地人・路郎選天位に不朽洞賞  
★特別課題優勝者に路郎賞 ★優勝者併開の会に大賞券幅  
を贈る。(優勝楯は明年川柳まつり当日返還、川柳支部、  
準支部に属しない作家が優勝した場合は川柳本社の獲得と  
なる。)

余興 有志 諸家  
有志 川村 好郎  
閉会の辞 川村 好郎  
会費 百五十円(参加者全部におみやげ進呈)  
懇親宴 会費三百五十円(同会場において5時半  
から7時まで)

★ご一泊ご希望の方は六百円(三食つき)でお世話いたします。但しお申込みは4月15日までに。  
★投句だけの方は郵券三十円同封(〆切4月末日)

大阪市生吉区万代西五ノ二五

川柳雑誌社

電話 〇六〇八一番

④ アレキサンダー大王

大王

左手の人物はアレキサンダー大王、文化をあらわすたいまつと武力をあらわす剣をもっています。大王は地図の中に描きあらわした線のようにはペルシアを中心とする東方の国々を占領しました。若死しましたので政治的統一はすぐに破れましたが、彼ののこした文化はヘレニズムといわれ、ギリシアとオリエントをたくみにむすびつけるのに成功しました。このヘレニズム文化は今日に大きな影響をあたえています。ヘレニズムの中からは今日の文化が生れたという方が適切でしょう。

右側の頭の大きい子供は次に出てくるローマの図の中の力士のようなたくましい仁王立姿といっしょに見てほしい

のですが、これはギリシア文化の特長をあらわしているのではありません、あらゆるものをつくり出す力にすぐれ、理論的であったギリシアのすがたを要約いたしました。アレキサンダー大王の先生であったアリストテレスという学者は、あらゆる学問をした人



エジプトの砂に科学が孵化される

新緑五月に展く

一年一度の川柳絵巻

シーズンにはよし、風景さらに佳し。みどりの宝塚。付近の名所はたくさんありますが、温泉と歌劇は世界的なものです。宝塚ヘルス・センターや動物園・植物園などお子達にもよろこばれます。地方の柳人はもとより近県各地みなさまもお家族づれでぜひことしの川柳川柳まつりへご出席くださいませ。

宝塚撮影所見学

宝塚会場の阪急旅行会館へ十五日午前十時までに(川柳まつり当日)お越しの方には宝塚撮影所へご案内申し上げます。みどり輝く5月15日の宝塚で、全国の川柳人が一堂に集まる川柳まつり、おもうだけでも胸がどどります。

川雑 川柳まつりは  
5月15日(日)  
会場 宝塚阪急旅行会館

大阪一名古屋 2時間27分

**近鉄特急ダイヤ**

スピード・アップ

2階電車毎日 9往復

大阪上本町発	7.00	8.00	9.00
	11.00	13.00	15.00
	17.00	18.00	20.00
近鉄名古屋発	7.25	8.25	9.25
	11.25	13.25	15.25
	17.25	18.25	20.00

座席指定特急券 5日前から発売  
近畿日本ツーリスト 交通公社 特急始発駅

**近畿日本鉄道**

不朽洞会員のシンボル

**美しいバツジ**

送料八円

申込所  
大阪市住吉区万代西5の25  
**川柳雑誌社**  
(郵便口座大阪 75050番)

川雑 **婦人友の会**  
会員集募

連絡事務所  
大阪市南区ニッ井戸町23  
山川阿茶

# 宴会部会員

— 宴会あれこれ —

・ 岩崎愛二 ・



で、その日の昼間には、間違いない句会があるのですが、それは、顔を出さないのだから、「宴会部会員」と云われてみても仕方がないのです。

それでも、本人のわたくしは、何んとかして、句会に出たいと願っているのですが、そんな日に限って、昼に別の会に、どうしても出席しなければ、義理の悪いことが起るものなのです。この十五日の新春初句会には、どうあろうとも、それにも出、夜の宴会にも出て、長い間の「宴会部会員」の汚名を雪ぎたいと念じておりましたところ、またもや、同日の昼間ぬきさしならぬ会合が、飛出して来て、これまたおじゃんです。

わたくしの「宴会部会員」の盛名？は、本社だけでなく、篠山にまでひびいていっているのです。昨年の四月十日、この日は、篠山での川柳大会が行われたのですが、この日は、御存じのように、皇太子殿下の御成婚の佳き日だったものですから早朝から、テレビジョンにかじりついていたまま、午後の大パレードまで、見てしまったのです。さあ大変、篠山には行きたいし、時間は、そろそろ宴会の部に入っているらしい。大阪に出ていては間に合いそうもないと見て取ったので、宝塚まで飛んで、福知山線の列車をキャッチし、一時間

みなさんは、わたくしのこと  
を、「宴会部会員」だとおっしゃいます。そう云われてみると、川柳雑誌の宴会には必ず出席いたしております。  
宴会のあるのは、年に数える程

余りで、築山に到着、宴正にたけなわになろうとする頃、会場にすべり込んだようなしまつでした。「ここでも、やっぱり、宴会部会員やな」との声がかかりました。

宴会にもいろいろあります。大阪だと、鶴家、灘万、さか卯、花外、吉兆など一流の料亭、南北のお茶屋のそれから、二流所の割ほう店、シナ料理、西洋料理、集會場での折詰料理等種々雑多です。

一流料亭、お茶屋では、先ず芸者のおどりというものがありません。それは、お座付程度のものなのに、やる方も観る方もしかめっ面をして、芸術観賞とばかり、盃の酒を上げることも遠慮するといふやつかいな時間を持たねばなりません。これは、大変つらいことですが、紳士道とは、こうしたものだとされているのだから処置なします。

そこへいくと、シナ料理の宴会は、そんなもの一さい無しで、初めから終りまで、飲むこと、食うこと、しゃべること、ようもあれだけ食べたものと思っただけ、腹の中は、すうっとしています。川柳雑誌の宴会は、大概、大万御勉強の折詰が出るようですが、これが仲々よろしい。杉の木の花がほんのり移っている折詰料理は、わたくしの大好きなカマボ

コあり、玉子焼あり、焼きさかなあり、フライありで、内容豊富で、二時間位の宴会なら、最後まで、さかなに不自由しません。第一かさばらぬこと絶妙で、立ち居、振る舞い、自由自

在、今、料理をほうばっていても、指名されれば、歌をうたうも、おどりを踊るも、楽に出米ます。一流所の宴会でも、座が乱れて来ると、お膳をひっくりかえす馬鹿者が出ることも定事です。折詰ですと、ひっくりかえしうもありません。宴果てて後の清けつなごと、これまた天下無類です。残して持って帰る人は、ひもを掛けて持っただけで結構。食った者は、残しておいた包み紙に入れて置いておけば、それでよろしい。折詰宴会を礼賛すること、よってくだんの如しです。

義理で出る宴会はどつまらぬものはありません。よぶ方も、よばれる方も、何かのひっかかり、或は利益がからんでいるから、盃を上げて、談笑しているようであり、お互いに他人の腹をさぐり合

て、お互いに他人の腹をさぐり合

工業技術院長賞受賞

軽やかな書味 楽しいお仕事！  
適した硬度をおえらび下さい。  
H.O.P 学生事務製図

鉛筆

## 寒中見舞

月刊ながさき

池田可宵  
長崎市新大工町

桜川不水

島根県大原郡木次町  
木次支部

藤井明朗

高峰柳児

っている。これでは、楽しくるべき宴会料理も、砂をかむ思いです。そしてその宴たるや、一人当り、万金を要するところでは、恐るべき金銭と、精神の浪費により、云いようがないではありませんか。(不朽洞会参与/毎日放送・教育放送会議専務理事)



路郎主幹から表彰状を受ける不二田一三夫氏右端は司会西いわを氏 (多久志氏撮影)

川柳雑誌社主 催

# 新春川柳大会

会場 大阪観光ホテル

主幹は文楽の人形を見られた日の感想から、新らしさと古さを川柳へ結ばれ、川柳のうがちの重要性と、名句を生む心がけをじゅんじゅんと説かれた。

賞者をきめることに不朽洞会から案が出て、その決定を主幹がされることになった。

まず一月の中島生々庵氏につき、不二田一三夫、土井文蝶、平沢保美、山川阿茶、金泉万葉、真鍋一瓢、清水白柳、里田一十、友淵貴山、川村好郎、種谷敏明諸氏の中から全出席者が受賞候補となり、一三夫、阿茶、保美、白柳の四氏から厳選、僅少の差で34年度

の不朽洞杯永久保持は不二田一三夫氏ときました。主幹お心づくしの「いつまでも肉と葱との仲であれ」に因んで、肉と葱との副賞が明るいついを誘う。

短冊交換で主幹の短冊を手にした人々のよこごびは大きく、ここにも新春気分が横溢してほほえましい一コマがあった。

ことしは不朽洞杯の決戦を行わず、年間成績とその出席率等で受賞者をきめることに不朽洞会から案が出て、その決定を主幹がされることになった。

34年度全出席者二十二名  
児島与呂志・石倉旅風・不二田一三夫・田中狂二・菱田満秋・西いわを・若本多久志・河井庸佑・樋口舟遊・平沢保美・丸尾潮花・山岡半歩・西田柳安子・河相すゑ・橋高薫風子・後藤梅志・山川阿茶・傍島静馬・川島葉乙女・清水白柳・金井文秋諸氏は、一年間の努力賞をうけられた。

主幹ご夫妻、総務部の林さんを加えると突に二十五名の全出席者となる。おそらく柳界最高の数字であろう。それから三年以上連続

快晴に恵まれ、会場である大阪観光ホテルが、道頓堀川にその威容を映つし、本堂の新春川柳大会の開会を待っている。

主幹ご夫妻、総務部の林さんを加えると突に二十五名の全出席者となる。おそらく柳界最高の数字であろう。それから三年以上連続

出席者は淡舟氏の六年は別格として、多久志・梅志・いさむ・与呂志・柳安子・庸佑・一三夫の諸氏がある。

徹しゆくの中にも和ごやかに各題の披露もおわり、待望の「口八丁」が主幹から発表され、35年度の不朽洞杯は巨星西尾葉氏の佳句に輝いたのである。

出席者名簿のトップは、岡山の雄、川幡弓削支那長直原七面山氏。つづいて各地のなつかしい柳友が続々つめかけられ、会場はまたたくまにふくれあがる。

懇親宴は毎日放送の岩崎愛二氏も出席され七時半賑やかに散会。川柳紅白試合 清水白柳選 エプロンの白さも若い姉女房 惚れたのは貴方が先きと 姉女房 姉女房覚悟の上の恋なり 白組勝つ。(三才だけ発表) 次書き

度は別格として、多久志・梅志・いさむ・与呂志・柳安子・庸佑・一三夫の諸氏がある。

徹しゆくの中にも和ごやかに各題の披露もおわり、待望の「口八丁」が主幹から発表され、35年度の不朽洞杯は巨星西尾葉氏の佳句に輝いたのである。

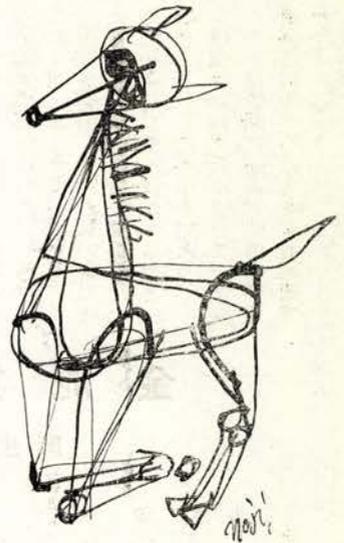
## 集 泥 金

### 選 乃 菖 生 麻

課題「電化」

- 荒神さんの嫉妬を昔なに電気釜 きさき子 豊作へ電化電化と呼びかける 同 豊作に村は電化の家並び 同
- 電化ふとさみし畳のある限り 同 電化してもやがり妻の座はせむし 奈良子 としよりも家庭電化にさからわず 美代
- スイッチを切ればらめた電化なり 同 電化するプランを胸に共稼ぎ 同 停電へ片腹痛い洗濯機 周甫
- 掃除器の故障で今日は箒持ち 阿茶 新築へ電化の部屋を見せたがり 万女 アパートへ電化の嫁の荷がはいり 一栄
- 電化プラン電気の量が痛になり 同 電化して停電の日にお客様 同 電化して御飯は妻の味でなし 知恵
- 電化して息子の修繕危なかり 同 寒村の駅を電化の汽車通過 美音子 ポケットで電化の音を高くさせ 小菊
- 仲人は電化と見合させるよう 良子 電化村煙突知らぬ子が育ち 同 電化して田舎の母をまごつかせ 徳子
- 上品なことばで電化句わせる 同 トランスが悲鳴を上げた団地族 若菜

次回題「下書き」〆切二月末日



路集

白紙

小西無鬼選

大半は日記白紙のまま師走南天  
ポケットに押込む白紙の心付け藤波  
正座して白紙に心あらたまる静水  
金払ろて白紙になった声となり可住  
純潔でないが白紙で嫁にゆき敏子  
協議した答案白紙も悪びれず同  
またしても元の白紙がくずれかけ  
呼び出され平身低頭子の白紙酔夢  
結局は金が白紙にして返し たもつ  
張る意地も白紙へ戻りたい同志和三郎  
過去は皆水に流したハイボール萃春  
切れ味を見せるに白紙切って見せ初甫  
貯金帳一行だけであと白紙義雄  
白紙ですあなたの色に染まる気のどんたく  
寄せ書の初筆白紙に気を使い光郎  
白紙にて清き一票僕が入れ北海坊  
救いようない白紙答案に弱って居庸佑  
寿と書く白紙も畏こまり進之助

白紙を上げて先生の恐わい顔市郎  
失言を白紙にしといてくすぶらせ与根一  
白紙きれいに動き裏千家とか同  
白紙選えするには世論きびしう箱川  
一瞬にして新聞紙となる白紙白葩  
ゴシップは嘘嘘嘘よ白紙なの雪美  
保育園白紙に何か書きたがりたけお  
オストされて白紙で出せば師も笑い夜潮  
白い紙重ねて返えず嬉しい日狂二  
折鶴を折る白い手に白い紙鶴汀  
白紙の立湯でと支持を渡るなり雄声  
しこりまだ残った白紙の裏表豊年  
いつも白紙割切ってガム噛む娘同  
別居三日白紙に戻す使者が来る昌男  
かぶりつき舞台の雪が襟に入り淀月  
白紙委任株主と云う端株主蜻蛉  
赤い丸書いて白紙が旗になり妖人  
氏神へ白紙でまかす長期スト井蛙  
アリバイがあつて白紙になる捜査孝風  
お返しに白紙へ子供がつかりし兼治郎  
白紙出したと言つた奴が合格し忠三

大物がこてて白紙に又もどり敏明  
白紙委任さらさら人を疑わず吉枝  
仲人の白紙別口持って来る宗太郎  
しがらみの義理に苦しい白紙票八九寸  
書き初めの白紙へ墨のいい匂い同  
水引を掛ける白紙を別に買い鶴声  
答案の白紙は裏から入る肚山椒坊  
童心を白紙に例えて子をかばい十九平  
白紙にしてもやっぱり行詰り愛鳩  
白紙で一任したくせにフツフツ言い巖  
印一つ押せば白紙も生きて来る慈雨  
糸を引くのが居て白紙主張するむじな  
OKの白紙へ排む輪転機代仕男  
白紙のしみへさびしく売れ残り仙台子  
白紙からご幣になって拜まれる旭峯  
五年越しの裁判白紙に又戻り蘭  
墨すつて白紙へ大きく息を止め雪峰  
銭別を相談している白い紙卯之助  
ヤマ全部はずれた白紙へベルが鳴り生薑  
下書と清書白紙の運不運圭水  
結婚解消白紙になったように言い恵二朗  
あの話白紙にねとはべいの電話吸江  
一時間何考えていた白紙ひか平  
臥いても白紙に判を承知せず圭井堂  
大物のよこれ白紙になる不思議真奇  
白紙ではないが答えは皆違い実男  
離縁状白紙になって子が残り夢路  
なるようにすると家計簿もう白紙雄々  
焦躁の白紙晩んで吐息する古心

恋と慾みな御破算で尼になり萃春  
白紙に包んだチップ知れており和楽  
白紙には戻しきれない子を宿し一鶴  
アンケート白紙のまま舞い戻り美音子  
受験料返してほしい白紙なり圭水  
人  
娘の涙見れば白紙に戻されずひか平  
地  
父からの為替白紙に巻いて来る光郎  
天  
阿呆らしい賀状の裏を書き忘れ南牛史  
軸  
一線の折り目白紙にある威巖  
無  
力  
津田麦太楼選  
まっとうな暮し無力を憚らず淀月  
唇を噛んで無力の座から立ち代仕男  
定年の無力の夫を持てあましたけお  
老いてなお無力の夫信じ切り狂二  
亭主の無力に女房シャンシャンと通り  
両親の無力へ反逆児が生まれ美音子  
長男の無力やもめで残される生薑  
無力だと自覚が出来て楽になり和楽  
なりゆきにまかせ無力はさかわらず昌男  
年下の無力の夫に浮気され尚文  
無力とは言つておちぬ事が出来秀峰

長いものに巻かれかしこい無力なり 保夫  
 穴あいた靴に無力の父思う 鶴汀  
 無力は無力ながらにうまく生き 巖  
 見くびった無力に余生支えられ 八九寸  
 無力でも惚れた弱味でよくつぎ 雄々  
 本爆の世にロッキードの無駄を買い 光郎  
 無力な父で汚職など知らず 一鶴  
 反抗期の我が子に父母は無力なり 句念坊  
 就職にあぶれ無力がつきまとい 雪峯  
 柳の如くのれんの如く無力生き どんたく  
 二十年添うて無力を今にせめ 真奇  
 無力なる故に信用されている 与根一  
 男一正税吏の前に無力なり むじな  
 旧華族無力を売って店栄え 吸江  
 学園の自治へ警察無力なり 実男  
 志からは無力者とは思ってず 雄声  
 無力なる夫へ四十で染める 瓜 和三郎  
 札束が男一正無力にし 井蛙  
 無力とは判っていても腹が立ち 夢路  
 口八丁夫を無力に仕立上げ 生薑  
 先方が無力と知った口を利き 幽谷  
 無力でも毛並のよさで地位につき 十九平  
 無力だと気付かすために骨がおれ 圭木  
 米洗い洗い無力が情なく 愛鳩  
 無力さを見抜かれてからがなりなで 恵二朗  
 手の甲で無力の涙押えとき ひか平  
 泣かされて戻る無力に父がない 藤波  
 無力でも子だけは一人前に持ち 天紅  
 變むしって自己の無力を叱咤する 夜潮

無力でもないいきとちびりちびりのみ 祥月  
 がしんたれと言われて無力腹をなぞ 進之助  
 無力者一人前の事は言い 蘭  
 無力とは母に数かれる父の事 徹也  
 かついでも見たが無力なのにあきれ 十九平

五 客

遠巻きに無力ばかりが立って居り ひか平  
 やせ我慢張って無力をさらけだし 俊見  
 言い負けて戻る無力へ妻が行く 圭井堂  
 肩書がとれて無力な父となり 真奇  
 五十年コツコツ溜めてきた無力 鶴汀

秀

本当に無力と知って年をきき 幽谷  
 無力だとなめてかかつてしてやられ 庸佑  
 おこぼれへかしまるる無力もの 代仕男

### 変化

#### 小浜牧人選

伊勢湾台風

思い出の一つ一つが泥と化し 仙台子  
 変化ない顔が大根役者にし 忠三  
 草月流明治生れに読みきれず 蜻蛉  
 登山者を尻目に山は変化する 白葩  
 ダム工事村を大きく変化させ 八九寸  
 観光地村にモダンな橋が出来 南牛史  
 金にこと欠かず変化な日を送り 孝風  
 めずらしく妻にやさしいことを云い 句念坊  
 親の知らぬ間に思春期は変化する 祥月

言うことが無くて変化がないと言ひ 藤波  
 子の成長変化たのしいものうち 雪峰  
 変化ないくらし浮気がしてまた 妖人  
 科学の世原子が平和の灯を点し 井蛙  
 ウィンドの変化横目に通勤車 美音子  
 変化した娘は失恋をかんぐられ 巖  
 金故の変化でないか否定する 慈雨  
 鳥籠の様に変化のない暮し さんたく  
 政治家として表情に変化持ち 与根一  
 垢抜けをしてから家出の娘が戻り 実男  
 ご機嫌の変わぬ裡とたかられる 圭井堂  
 心境の変化鼻唄まじりて来 宗太郎  
 変化ない顔が揃った通勤車 南天  
 一封に心が変わるふところ手 夜潮  
 変化ある世相に変化なくくらし 鶴声  
 変化する車窓に飽かぬ一人旅 十九平  
 甲子園眼をつけられた変化球 淀月  
 変化した事も恋人出来てから 豊年  
 変化なき故郷の山河へ年をとり 初甫  
 山茶花の色隠れ家に変化 添え 美音子  
 カートンでせめて変化と言う生計 敏子  
 保守党の肩を持つ程金が出来 豊年  
 ジャルからカァに変わる芸を持ち 恵二朗  
 ふと泣ける心に変化さざむ恋 雪峰  
 流行より政治の方がすぐ変り むじな  
 変化する街忙しくビルが建ち 鶴汀  
 百姓も背広が欲しい世と変り たけお  
 ぎりぎりの暮らし変化を言うとなす 静木  
 丹前を着れば社長も変化する 木魚

一問忌心の変化恐くなり 圭木  
 変化する浮世を笑う鉦の音 和三郎  
 心境の変化何んでも呉れてやり 蘭  
 変化なき暮しの中は子は育ち 雄三声  
 失恋の男それから弱くなり 仙台子  
 身体中の変化探して更年期 初市  
 ネクタイで変化をつけただけのこと 愛鳩  
 顔色の変化刑事は見逃さず 恵三朗  
 変化する雲を睨めて孤独なりき え  
 紙幣束が女心を変化させ 光郎

佳

塗り替える度に事務所の名が変り 光郎  
 子を産んで妻の変化に押され気味 雄々  
 それからの男笑わぬ日がつつき 昌男  
 貧乏がこんな心にしてしまい 卯之助  
 変化した故郷思い出が見当らず 鶴汀  
 娘から女に変る高島田 きえ  
 変声期鏡がほしい顔になり 葉春  
 二代目の養子家号を横に書き 進之助  
 変化する気配売り手に立っど決め ひか平  
 墨をする裡にも女気が変り 夢路

人

ベッドから雲の変化に倦きもせず 愛鳩  
 心境の変化お酒が欲しくなり 雪美  
 運命の変化はちびた靴を履き ひか平

天 軸

# 柳界展望

旬会

▼本社二月旬会は七日  
 (日)午後六時から日  
 本橋北詰東六階会議室で開催。川維北詰支部(堺市)新年旬会は二十四日(日)午後一時から諏訪ノ森会館で開催。▼南海電鉄川柳旬会(大阪市)は一月二十八日(木)午後六時半から、難波の親和クラブで開催。以上路郎主幹出席。▼佐世



## お芽出度う会

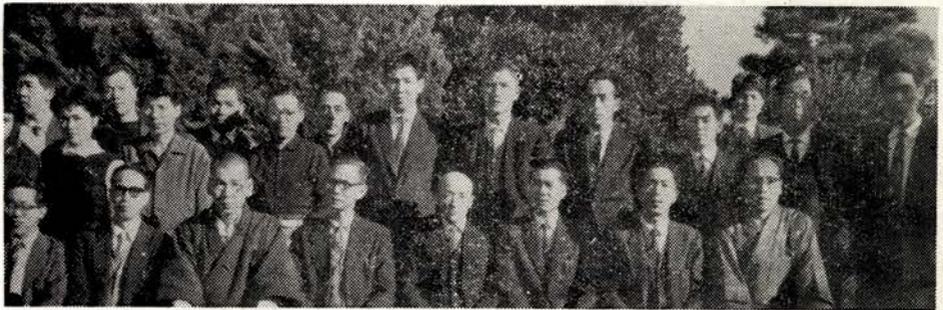
★路郎・葎乃両先生を迎えて新春恒例の常任理事おめでとう会は一月一日午後三時から三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催された。屠蘇一巡の後、路郎主幹の年頭の辞は、「昨年来身体の復調は著しいが、今年一年自重の年としたい。川柳まつり・川維四百号記念大会など主要行事を控えて諸君の奮斗と協力をお願いする。」と抱負を述べられ、早速生々庵副主幹お心尽しのおせち料理による酒

保市の愛宕祭協賛川柳大会は一月二十四日正午から相浦町供徳寺で開催される。▼噴煙十周年大島濤明古稀祝賀川柳大会は三月二十日(日)熊本市農協会館で開催。兼

顧人生路郎選・喜劇三太郎選・現金魚選・田満紋太選・船津明選各題三句、投句は五十円封入の上二月二十五日迄に熊本局私書箱45号祝賀大会事務局宛。▼川維下関支部新年旬会は一月十日下午関鉄道会館で開催。▼川維松江支部新年旬会は一月九日夜なにわ館で開催。▼川維名古屋支部新年旬会は一月十日開催。▼川維広島支部新年旬会は十二月十五日夜広島駅二階会議室で開催。▼岡山電報局ゆめ忘年旬会は十二月十五日法院居で開催。▼川維備前支部(岡山県)忘年旬会は十二月十九日浜田久米雄居で開催。▼川維下関支部忘年川柳会は十二月十二日下関鉄道会館で開催。

## 消息

▼路郎主幹は一月十日(日)日車翁終焉の地を訪ねられたが、愛二・水客・三三・薫風子・宏子・奈良子の諸氏が随行した。▼岩垣日本村氏(大和高田市)は朝日新聞奈良版の川柳選者として、「川



葎川柳会七周年記念旬会

(松江市)

(写真説明)前列左より藤井貞道・福田英誠・江天衛人・足塚之助・青砥可明・中尾飛鳥・平野敬幸・田村幸三郎・中列左より藤原まき子・吉岡政子・門脇政富・榎本登美也・原森峰・岡崎祥月・柳原重雄・山崎福雄・小長谷由田可・松浦一生・後列左より藤部慎道・田中よう人・柳野重魚・桑原夜洲男・松川祥生

柳この一年」十二月三十一日に掲載された。▼松村万古氏(倉敷市)は昨年三十三年間の教員生活に終止符を打たれたが、自宅で数学の塾を開き、新しい天地へ再出発された。▼木谷竹荘氏(大阪市)夫妻は、一月三日お孫さん二人連れて上諏訪温泉に遊ばれた。

「汽車の窓疲れを知らぬ孫二人」▼小浜牧人氏(西宮市)は十二月十七日西宮市明和病院で、胸部成形手術を受けられたが経過良好とのこと。▼杉本一鶴氏(貝塚市)は十二月十七日左肺動脈内スポンジ充填手術を受けられたが、術後の経過良好とのこと。▼若本多久志氏(西宮市)は一月三日南紀の旅を続けられ、海南の温山荘で息のひと時を過ぎされた。「老妻を嬉しがらせる旅楽し」▼前田伍健氏(松江市)はNHK年末隠し芸大会で白組の主将を勧められ、副知事が主将の紅組と渡り合い七番勝負引分けであった。▼直原七面山氏(岡山県)は一月九日(土)岡山東警察署あわび川柳会の新春旬会に出席、「現代川柳の動向と岡山県の川柳」と題し柳話された。

▼山田季賀氏(広島県)は一月八日胃経線に黄痘を併発、広島鉄道

# 不朽洞の人々



宮大工として嬉しいことは起工式、上棟祭、選座祭、のあることです。工事が進行中の苦心も報われることのないこともこうした儀式の厳格さと、雰囲気の中に居ると日本一の幸福者のように感じられて、目出度かって居るのです。

## 儲けなど言わず職人目出度がり

(白柳)

小児科・沢田医院

沢田四郎作

大阪市西成区玉出  
本通り一ノ一三

寒 中 見 舞



宴となり、川維ならではの和気が横溢する中を先ず潮花氏の舞踊「鶴の声」、霞乃女史の舞踊「白扇」、生々庵医博の舞踊「浦島」が続々と披露され、小石さんの小唄が出る頃には手拍子も乱れ勝ち、出席者歓を尽して午後八時散会した。  
(写真は正面路郎主幹・霞乃女史以下向って左から生々庵・文蝶・小石・恒明・一人おいて古方・紫香・いわを・五人おいて榮・春葉一人おいて梅里・竹莊・薫風子の諸氏)

病院第一病棟階上第一七二号室に入院された。▼田垣方大氏(倉敷市)は一月十日の川維倉敷支部新春句会に笠岡市より来会された遠二、真奇、隆文、衣里子の諸氏を自宅に招待、一善氏をまじえて歓談された。▼岸南柳氏(大阪市)は全国理美容新聞に「オイ兄弟なんて油断の出来ぬ友」などの句を発表された。

### 慶 弔

▼橘高薫風子氏(大阪市)は一月十三日次女出生幸(こう)と命名した。▼前田雀郎氏(64)(東京都)は2月17日午後5時50分尿毒症のため東京都芝北里研究所付風病院で死去。川柳丹若会を指導し川柳人々ヲ顧問として活躍。謹悼

### 句 集

▼川柳はこたて百号記念句集「蝦夷柳」が昭和三十五年一月一日北海道函館市青柳町十七函館川柳社から発行された。定価二百円。▼川柳句集「ひと」が昭和三十四年十二月二十八日熊本市池田町神田川柳研究会から発行された。非売品。

▼川端柳風氏は住居を左記に新築移転された。東京都渋谷区幡ヶ谷本町二ノ三五一電話(三六九)〇〇九五番。▼上林粗影氏は字部市東区東則貞公会堂筋へ転居。▼福田安彦氏の住所が改称された。豊中市庄内西町四丁目二十一番地。

### 電話開通

▼西いわを氏(大阪市)の自宅に電話が開通した。大阪生野局④八四七三番。

### 転居・住所改称

# 名世物語

のちある句を創れ  
▼用紙は原稿用紙▼文字は正  
確▼締切毎月十五日▼投稿先  
本社宛

## 本社新春句会(大阪市)

1月15日 午後一時  
会場——大阪観光ホテル

新春句会で恩師の火と燃える川柳愛の講演を年頭の辞にプログラムは進み、5月15日の川柳祭、9月号の四〇〇号記念と豪華な行事が待つ一九六〇年は路郎イズムの更に前進する年である。34年度の不朽洞杯は一三夫氏、35年度の不朽洞杯は英氏に、34年度の全出席者(35頁参照)も表彰され巨歩堂々の新春行進だ。

出席者—路郎・七面山・多久志・柳宏子・奈良子・敏明・正一・ともゆき・紀子・摩太郎・満秋・参無子・薫風子・紫香・一三夫・万葉・いさむ・いわを・狂二・昌男・舟遊・和楽・好郎・小石・全信・尚徳・文秋・井平・三舟・鎮海・静馬・白香・一十・古方・阿茶・光輪・進之助・千尋・珊枝郎・水堂・守信・愛論・庸佑・南宗・吸江・白柳・栞・高史・水断・亜鈍・帆船・圭升堂・客遊子・すゝむ・旅風・水客・尚史・半歩・三司・湖花・豆秋・梨花・晃・吉備郎・徹也・藍児・保美・柳洞・十悟・生々庵・紅月・とも子・増治郎・雄声・左久良・梅志・竹莊・博也・良子・愛二・宏子・霞乃

### 兼題「口八丁」 麻生路郎選

貨上げへ口八丁の顔が寄り 山椒坊  
 口八丁又長屋中をもめさせる 六童子  
 口八丁一つも実行して呉れず 句念坊  
 口八丁しがない街の職に立ち 花宵  
 口八丁とうとう刑事をあやませ 淡舟  
 口八丁主人の分も引き受ける 黒天子  
 口八丁無口な人に使われる 晃  
 税務署へ一目置かず口八丁 柳志  
 業界を口八丁でのしあるき 梅志  
 口八丁もう効めない夜逃げする 文秋  
 切れ過ぎる養子へ不安つり出し 圭井堂  
 次点まで口八丁で来たもの 圭井堂  
 団交は口八丁の鉢合せ 正一  
 口八丁金のことにはふれず 栗  
 口八丁亭主養子と間違われ 好郎  
 口八丁手も八丁へさからわず 井平  
 口八丁はチグハグなのも女 与呂志  
 口八丁ボリスをうまく丸めてき 十悟  
 口八丁けつきよく借金だけ残し 一三天  
 何となく鼻進止った口八丁 月都  
 税務署へ口八丁がやらさる 高志  
 口八丁など言われおり厚化粧 登記  
 口八丁を買われ赤旗振らされる 梅里  
 十二月口八丁が湧えてくる 薫風子  
 寄付集め口八丁は又回り 悦子  
 誤診して口八丁を役に立て 生々庵  
 逃げ道はこしらえてある口八丁 昌男  
 口八丁まだ賈敵がついてない すゝむ  
 保険屋に隙も与えぬ妻の弁 狂二  
 口八丁同士で意見衝突し 凡吉  
 口八丁何もそこまで言わずとも とき  
 口八丁だけで契約まだとれず 満秋  
 口八丁この娘もママに似てるらし しげを  
 口八丁無駄とおもえど卓たつき 香林  
 口八丁多分夫の威も借りる 清人  
 口八丁不利になったら座り込み 阿茶  
 口八丁詐欺をやる程落ちぶれる 文秋  
 口八丁かんじんと聞かず去に 宏子  
 逆らって刻を潰した口八丁 旅風

### 兼題「口八丁」 夢虹

口八丁焦げた臭いを教えられ 一瓢  
 口八丁恋に喜劇の男なり 夢虹  
 口八丁自分の恥もさらけだし 栗  
 兼題「自家用車」 西尾 栗選  
 自家用が止まると近所いい噂 白柳  
 一力の前で灯を消す自家用車 竹莊  
 白足袋を汚して降りた自家用車 潮花  
 そもそもは自家用買って落ち目 舟遊  
 男一匹自家用で待たす令夫人 摩太郎  
 清交社まで散髪する自家用車 万葉  
 はねらして恐縮して乗る自家用車 満秋  
 自家用で送って貰うて気が変り 水客  
 自家用車箱根を越してみたくなり 旅風  
 自家用車つけて特売湯へ消え 昌男  
 自家用車サラブレッドを追いまわし 進之助  
 自家用に女は哀し乗りたがり ともゆき  
 自家用で命をおとす羽目となり 奈良子  
 自家用車ゴルフは叩くだけの腕 梅志  
 自家用で出てハイヤー戻って来 昌男  
 悪友は自家用でもて唄でもて 圭井堂  
 任意出頭という自家用にそり返り 夢虹  
 ライバルのくまも知った日の無口 昌男  
 自家用を信じ切ったが身の破滅 梨花  
 中暮は海老蔵が出る自家用車 圭井堂  
 白い目を意識している自家用車 三司  
 故里を見直した来た自家用車 しのぶ  
 警官の眼には怪しい自家用車 白柳  
 自家用の列小田原会議まだっけ 尚史  
 自家用の中で商談済ましとき 好郎  
 自家用車ババは誤解ばかり受け 花乃子  
 自家用車黄色い声に乗せたがり 与呂志  
 自家用を持つて方借り手なり 圭井堂  
 自家用車きょうは愚妻と言ふを乗せ 三司  
 自家用を持って後れることに馴れ 保美  
 自家用車十分程の義理で来る 永断  
 自家用車舌打ちされている速さ 栗  
 兼題「さし向い」 川村好郎選  
 さし向い精算をする無口なり 孝風  
 さし向い呼鈴の位置教えられ みつを

### 兼題「さし向い」 一十

さし向いはつといてやとる祝儀 一十  
 人妻という間隔のさし向い 愛論  
 さし向いならと年寄りきらわれる 客遊子  
 さし向い希望していて嫁き遅れ 雄声  
 さし向い夢を破った年始客 三四郎  
 さし向いになればぶつり言葉切れ 全信  
 さし向いですと仲人念を押し 博也  
 熱つ熱つのむかしを笑う差し向い 圭井堂  
 さし向い電話のベルの邪魔が入り とも子  
 仲裁が時には欲しいさし向い 満秋  
 さし向い白髪一本抜いてくれ 万葉  
 さし向い気のきかぬのがまた座り 文秋  
 さし向いゼスチャッだけは始ており 多久志  
 家計簿を中にだまっただけさし向い 栗  
 猫だけが生き物というさし向い 白柳  
 家待つ妻が気になるさし向い 南宗  
 さし向いそろそろ夢が食い違い 梨花  
 気の弱い男と知ったさし向い 紅月  
 淡淡と炬燵をはさむ老夫婦 晃  
 さし向い妻の内職をはばからず 圭井堂  
 結末をつけるつもりさし向い 花乃子  
 さし向い女の方がとらになり 水堂  
 松頼もようやくなれたさし向い 良子  
 さし向い言いたい事が言いきれ 古方  
 お互いの皺を見つけたさし向い 木堂  
 飯台をへだてて古しさし向い 千尋  
 銀婚の苦勞仕達げたさし向い 阿茶  
 なかなか貴方と呼べないさし向い 井平  
 意地張つても言わぬ出る気配 旅風  
 さし向いそろそろわんわん出る気配 多久志  
 さし向いにされておやじの意見きく 静馬  
 さし向い邪魔になる子が一人欲し 与呂志  
 子等やとと単立ちちもとのさし向い 好郎  
 兼題「情熱」 正本水客選  
 情熱の過国会へなだれ込み 紅月  
 再会の女は情熱とうに消え 好郎  
 ドーランの下で情熱たぎってる 客遊子  
 情熱がいきなりドーラン蹴って来る 昌男

白い瞳を浴びて情熱主張する  
 十七字わが情熱は火の如し  
 情熱は舞台と離婚繰返し  
 情熱が冷めたと女去って行き  
 情熱の深きは母がきいてくれ  
 情熱家と言われ野心家と言われ  
 ストをやるその情熱が惜しいかな  
 情熱の歌廠河屋の細のれん  
 情熱家恋する情熱もやし出し  
 四十になつて情熱もやし出し  
 情熱家といわれ妻を変え妻を恋え  
 青春の情熱山はなだれする  
 情熱家の彼は手紙など書かず  
 情熱が不倫の恋を清く見せ  
 情熱のままに行動ける若さなり  
 童顔ではしゃぐ楽屋の老詩人  
 情熱の余じ日記へかきなぐり  
 ニココンの情熱失せず咲く選歌  
 カナリヤの情熱羽をふるわせて  
 情熱をむき出しにした過去の悔い  
 ひたむきな情熱版画ささむなり  
 情熱を綴って午前二時と書き  
 情熱を小出しに女独り生き  
 胸にバラさせば情熱よみがえり  
 情熱が養老院を湧きたたせ  
 又別な情熱に生き喜の祝  
 続続篇もう情熱の筆でなく  
 平手打ちそのパッションを待つていた

昌男  
豆秋  
生薑  
尚徳  
美舟  
蘭  
摩天郎  
一三天  
尚徳  
小石  
三司  
夢路  
生薑  
千尋  
すむ  
博也  
好郎  
花乃子  
高史  
梅志  
多久志  
左久良  
花宵  
圭井堂  
生々庵  
好郎  
水客

席題「数学」 須崎豆秋選

通知簿の数学に首ひねる父  
 麻雀の点数学と別のもの  
 数学が好きで男に負けてい  
 数学に明るく空くじ買わず  
 数学の通りにゆけばふえる金  
 幾何代教こなせてソバヤやこい  
 ケーキ切るのに数学応用し  
 零の発見ちよつとやそつとはなく  
 数学に英語が出来る子で楽し  
 数学者より天才で名を知られ  
 数学で飯は食えんぞと父のぐち  
 借金の方は数学的に増え  
 数学は弱く詩も書き歌も読み  
 処世学二二んが三で割切られ  
 数学の先生をして世に疎し  
 数学の宿題親爺いなくなり  
 数学へママの人生割り切られず  
 数学の下手が上手に金を貯め  
 数学に思い出がありカンニング  
 数学にあきて流れる雲を追う  
 数学の答が出ない世に生きる  
 数学は月の裏まで見て回り

和菜  
正一  
永断  
夢虹  
摩天郎  
阿茶  
白柳  
古方  
客遊子  
佐久良  
小石  
全信  
好郎  
文秋  
狂二  
旅風  
徹也  
舟遊  
井平  
奈良子  
晃  
旅風  
和菜

席題「へらず口」 水谷竹莊選

暴力を誘った妻のへらず口  
 へらず口たたいて好きと言わ  
 へらず口たたいて好きは好き  
 へらず口過ぎて出世の邪魔になり  
 世話好きのくせにうるさいへらず口  
 全没の選者に向けるへらず口  
 へらず口残念ながら借りがあり  
 へらず口にベロりと舌を出して逃げ  
 へらず口男一枚格を下げ  
 教科書で習わぬはずのへらず口  
 へらず口女に惜しい口をさきさ  
 へらず口そろそろ孫を持って余し  
 惚れている相手にだけのへらず口  
 貰い手が無いぞと叱るへらず口  
 へらず口きいてインチャキものを売り  
 同権は此処にも女のへらず口  
 こう言えば面白い返す子に育ち  
 へらず口たたいて隙のない男  
 着せかけてやればやうたへらず口  
 へらず口聞く子へ年玉やりそな  
 へらず口のとこまで母によく似たり  
 へらず口言いあい昔からの仲  
 もう母の手には負えないへらず口  
 へらず口たたける仲で酒うまし  
 セロテープ貼ってやりたいへらず口  
 へらず口裏へ回って叱られる  
 へらず口たたいて酒にする積り  
 逃げ腰になつても止まぬへらず口  
 へらず口叩いたあとへ来た謝礼  
 言いまけてくやしましませのへらず口  
 へらず口たたく孫見て嬉しがり  
 おなじみむかえるお女将のへらず口

一三天  
高史  
三舟  
正一  
狂二  
和菜  
好郎  
豆秋  
十悟  
一三天  
水客  
静馬  
潮花  
井平  
紅月  
進之助  
南宗  
千尋  
圭井堂  
尚徳  
摩天郎  
柳洞  
柳宏子  
白柳  
南宗  
いわを  
井平  
三司  
保美  
静佑  
静馬  
竹莊

席題「胃」 直原七面山選

胃袋が二つも欲しい忘年会  
 社用なら胃が痛むほど飲んで  
 浮世絵の美人胃下垂ありそな  
 二日酔はつきり胃袋あるを知り  
 胃は至極丈夫貧乏しとります  
 宴会がつづき過ぎやと胃もぐり  
 空っぽの頭で胃だけ達者なり  
 他所で喰う腹は胃散をもつ出る  
 食養生する気になつた頃胃がん  
 年始胃胃と相談もせず飲み  
 食へ過ぎの胃をバ保険で診て貰い  
 思わざる特級酒米で胃が慌て  
 胃袋がちよつと戸惑うツツを食  
 数の子の味をこつと胃は知らず  
 胃袋がタンノウツしている三カ日  
 胃散張っておまんやろがまだ食う気  
 胃が弱くいつか爪噛む詩人なり  
 元旦の餅が胃の腑でかしまり  
 飲み過ぎは胃病にしく賜暇届  
 飲む方の胃はまた別にあるらしく  
 チャンボンの酒胃袋に叱られる  
 熱かんが確かに胃袋まで届き  
 食いだめの効く胃袋が欲しくな  
 大阪の胃袋満たす貨車が着き  
 貧乏人の胃で焼酎も驚かず  
 胃の強い妻に粗食を強いられる  
 もう五十胃には重たい冬の水  
 次々と出る新薬に胃もあきれ  
 ウエツトな胃でクッキー受けつけ  
 胃がいたむいたむと酒を手離さず  
 失恋の酒を胃袋もて余し  
 貴重なる数の子胃の腑もかみしめる  
 胃袋の中も捜査のメモにのせ  
 胃袋はいかもの食いと悟つてい  
 胃袋の不満アルコール漬にされ  
 胃潰瘍といわれてからやれやれ  
 石塔でもかじりたい程胃が丈夫

尚徳  
満秋  
阿茶  
生々庵  
十悟  
多久志  
雄声  
潮花  
いさむ  
静馬  
雄声  
三司  
高史  
生々庵  
一三天  
潮花  
吸江  
木堂  
万楽  
庸佑  
柳宏子  
昌男  
紅月  
満秋  
千尋  
柳宏子  
愛論  
永断  
奈良子  
静馬  
柳宏子  
いさむ  
進之助  
良子  
七面山

(川柳紅白試合入選句次号発表)

(庸佑清記)

川 雑にしなり支部句会(大阪市)

後藤梅志 蓮

嫌やな日だ逃した耐がまたかかり 満潮
生まれたの蜘蛛はや逃げごとを知り 薫風子
世になれてぬらりくり判を逃げ 文秋
気のつかんことと玉子出してくれ 白柳
うちの鶏たまごを生んだ朝の声 旅風
産みだての玉子を積んで病みつけ 柳志
子沢山小さい卵をよって買ひ すすむ
宴会のとりも食べるだけの人 保美
宴会をそこそこのにするアッあり 十悟
落葉散るころくまさん冬やすみ 慎太郎
落葉から覗いたリスのとほけ顔 三舟
病んでる窓へ落葉がふきと鳴り 泰
お仏飯の湯気が仏の鼻へのび 太路
大めしを食べてる割に肥えぬ秋 舟遊
めし屋から現湯へ急ぐ肩へ雪 言也
とんとん拍子の出生生甲斐感じさせ 庸佑
生きがいは妻子と共に笑う日日 清人
生きがいは朝の空気をぐと吸ひ 青風
生き甲斐であった行司の職を去る 晃
書くことが生き甲斐という無精ヒゲ 敏子
生きがいは手錠をピンとはめた時 梅志

川 雑淀川支部句会(大阪市)

木村木堂 報

上役へ花を持たせる石を持ち 幽谷
上役のない夫が取柄小商売 和楽
給料の安い夫が飯を炊き 陽子
女房に扶養されてる不偉せ 水堂
あべこべ世間と知って馬鹿で生き 敏明
金払うのに税務署立って待ち 花村
継ぎはぎの障子に余生いたわれ 若菜
我が家楽し手親音縁の妻 句念坊
わが家には二男三女という宝 東洋男
新妻の待つわが家の道軽し 三十郎
子沢山わが家は憩うとこでなし さきす
パパ退院して我が家の春が来る 一鶴

わが家の平和と悲劇見て 帰り 清生
旅疲れわが家の昔に話し かけ 香林

川 雑阿倍野支部句会(大阪市)

金井文秋 報

遠い人のぬくもりだけが手に残り 美智子
思い出に苦しめられてまだひとり 山椒坊
火の車ジングルベルで駆けまわり 鎮海
火の車けんかと思類とため息と わたる
火の車みな薄情に見えてくる 若芽
火の車をP R すりや雑誌売れ 生薑
セックスをP R すりや雑誌売れ 梅里
ほうだらが漬ったまま年を越し 十悟
御破算の恋へ未練な糸を引き 庸佑
もみくちやの札をのびて店ほひま 凡九郎
思い出のみな失恋へつづいて居 唯義
火の車まる世帯に馴れて老い 清人
P R 頼んまっせとマダム 酌ぎ 清光
月の裏見せて強気のP R 葉光
火の車父子相伝という暮し 一三天
御破算もやっぱり合わザッのび 堰子
思い出のあとがつくほど抓られる 豆秋
口利かぬ妻とはなりぬ火の車 文秋
思い出は欺されて居た阿呆らしき 喜仙

川 雑玉造支部句会(大阪市)

西出一栄 報

やりくりのつかぬ手形へ朝寝する 井平
揚げ底と同じ厚さのケーキ出し 句念坊
売れ残りウイーン飾るデコケーキ 清宏子
お見合のケーキの何と食べ難く 清子
どたん場場で友情の何と胸にくる 文秋
友情のこぶしにやつと目を覚し 凡九郎
其の実は後日譚あるしめくり 一栄
縮くくりない娘で末を案じさせ 白柳
縮くくり頭上らぬことばかり

川 雑明和病院支部句会(西宮市)

西尾青一 路報

国訛りニユーモードが身につかず シュン太郎
国訛りわからんとこは笑つとき 球絵
国訛りきつく聞えて恐れられ 正雪
国訛り夜汽車の旅を起される 留三
国訛りとれないまなま出世をし 東雲
追分けのうまい男の国訛り 夢路
アリバイはキョウの紅からあしがつき 凡人
アリバイへ部長も中に入れておき すみ江
アリバイを名産店で買うて去に 裕郎
アリバイの傘は確かに借りており 牧人
信用の無い友アリバイ言うて呉れ 丹謡
思感が外れましてと借りに来る 泰
思感の末は田畑を売るとする 三舟
思感の土地ペンペン草のはえるま 榎
思感の酒までのまれ逃げられる 策平
思感の通りに行った袖の下 弦月
ねずみ年外猫を可愛がり 義子
ねずみ鳴きされて柳の灯が暗い 千尋
鼠まだ袋の中であきらめず 山友
療養の内緒の利かぬ天使の目 京子
大声で言つて内緒と釘をさし すむ
あけすけな嫁でないしよがんなばれ 二号もう化粧おとした落ちつきやう 青一
ひやけた素顔で話す旅帰る 美路
初恋の素顔のまま逢いにゆき 舟遊

川 雑京都支部句会(京都市)

田中鳥雀 報

雷鳴凄まじし当直簿異状なし 千潮
水の自由を渡まじいものと見る 烏雀
失敗を宿命として未だ悔ず 和三郎
人情の絡む失敗とはなりぬ 司郎
失敗を励ます言葉涙ぐみ 親生
面倒くさいので同感を表しとき すすむ
同感とまではゆかぬが拍手する 薫風子
すぐに同感せぬを昭和の生れとす 幸男
首をつなぐだりの同感と部長知り 正夫
末っ子の理屈が通る堀ごたつ 篤子

鉛筆の先とがらしている 理屈 山葉楼
ハンドバッグの鏡にえくはだけを入れ 柴蘭

川 雑西宮支部句会(西宮市)

若本多久志 報

一合が男を弱いものにする 球絵
失恋のそれから表情大人びる 花美
酒好きの夫で覚えた酒の味 寿栄
女事務失恋いわずやめていき 修児
酌きこぼすうぶへ男のこごた眼 六童子
遅う来てあつさり懸賞持って去に 弦月
甲斐性なしの夫に惚れて手内職 一歩
失恋の口をにごして娘はいわず 半歩
手内職障子の破れが気にかかり 三舟
遅う来て一番早よう帰る地位 舟遊
失恋をしてから秋の早いこと 一傘
すき腹に長い祝辞を聞かれる 静馬
遠慮した馳走へすき腹音をたて 満秋
空腹をいたわるようにバスへ乗せ 泰
失恋もようせず惚れるだけは惚れ すすむ
遠来の友へ五合買いにやり 多久志

川 雑弓削支部句会(岡山県)

直原七面山 報

保母さんに負けない程に子沢山 謹
保母だった妻が子供をよく泣かせ 天童
母のない兄へ保母さんの血がかかり 只世
子をたくす保母の若き気がかり 幸堂
靖國の夫と共に生きる保母 珠美
茶化されているとは知らぬお人好し たつよ
恋人がいるなど恋愛論茶化し 敬太
茶化されてそれから足が遠くなる 句念坊
茶化された相手へ募る恋心 文舟
大切な話娘に茶化される 尚子
茶化されて惚れた弱味のいが笑い こん太
行末を云うて病身案じられ 満夫
行末を頼りたい子はマッハ族 満夫

行末を聖書の前で説き聞かせ  
 行末を語る二人へ流れ星  
 貰い子に去られ行末暗くなり  
 行末を頼む子供に先立たれ  
 お人好しすぎて行末案じられ  
 行末は知らず今宵の角かくし  
 保険屋に身の行末を罰される  
 行末を流れてたくす落椿  
 行末は大臣になるアルバイト  
 居眠りが茶わんの音で眼をさし  
 居眠りが一番うしろに席をしめ  
 運ちゃんを信頼し切ってる眠り  
 居眠りをしながら姑寝てくれず  
 居眠りをしても役人金になり

(2)

愛嬌が隣りの主人をよろめかせ  
 愛嬌があつて商家へ貰われる  
 愛嬌に負けて催促切り出せず  
 愛嬌は少々上を向いた鼻  
 愛嬌のホッロ時々場所を変え  
 五十匁の味噌へ愛嬌をえて売り  
 寝められて未だに嫁けぬ娘を抱え  
 子を寝めて保険の話切り出され  
 保母さんの仲裁どちら寝てもや  
 個性美と云う重宝な寝め言葉  
 栄転へ内助の功も一寸寝め  
 大げさに寝めて反抗心を買  
 妻のぐちフンと聞いて寝る  
 連日のぐちが呑ませるコップ酒  
 年寄りのぐちいい加減にあらわれ  
 愚痴だと云えば倦怠期だとぬかし  
 年寄りのぐちを皮肉にとる落日  
 米實の恩師めつきり老け給い  
 愛情をふみにじらる老けて行き  
 勇退をしてからどっと老けた父  
 よろめかぬ享主をもって共に老け  
 寝め言葉習うて茶室の客となり  
 愚痴一つ言わぬ夫で頼りなし

静江 梅浦 信治 登仙坊 七面山 勝美 昭子 賤女 童児 順湖 信治 美沙 梅浦 山茶花 登仙坊 流風 光岡 句念坊 ちとせ 童児 幸堂 只世 賤女 静江 尚子 美舟 敬太 順湖 喜楽 満夫 天童 七面山

川維 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼選

半々に両派が割れて持ち越され  
 忘年会続き借金持ち越した  
 持ち越した父へ安堵の顔ならび  
 持ち越した秋を新酒と言ふ飲  
 畏かた秋を済ませ温泉に浸る  
 お見合が済めば茶自製の娘にか  
 ほんとうの事が云ふに見合済み  
 済み次第帰って来ても角出とり  
 ふる里のねずみの音もなつかしく  
 人食った顔でねずみが顔を出し  
 香港のねずみ密輸もかじらされ  
 ねずみ安心猫は夫人と寝てるだけ  
 うろちよと廿日鼠の悪戯憎めない  
 豊作へねずみもおらが春ならん  
 旦那さんが来てかんば早ようかけ  
 宿題はもう済んだのかいい寝息  
 もう済んだ後へ珍客顔を出し  
 どん底の暮らしへちよと遠慮せず

川維 鳥取支部句会 (鳥取県)

河村日満選

豊作が五年続いてテレビ買い  
 良く効く良く効く背に乗ってのあんま  
 もう一つの方の財布をすられとり  
 用心をして連帯の判をさけ  
 手伝って呉れと思えば按摩要り  
 用心の錠前も一度ゆすって見  
 連帯の一人は親に保証させ

川維 木次支部句会 (鳥根県)

藤井明朗報

そろばんを振って家計簿閉じこ  
 家計簿の外に予算があるポスト  
 家計簿にまだ無駄を知る共稼ぎ  
 明細に書けば家計簿怖くなり

川維 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平選

久方の友の名刺は保険員  
 これも商魂か名刺の馬鹿でっか  
 原稿は温泉のふん閉気から生れ  
 温泉に来て温泉を素通りし  
 良妻も温泉で浮れ踊って見  
 温泉でシシの出ることほんとし

川維 備前支部句会 (岡山県)

三村柳風子報

隣りから来て口だけで手伝いし  
 破れ傘それでも菊の霜をよけ  
 梅いのない掌に一輪の菊白し  
 丹精の菊チャンバラをあぶな  
 菊人形よろいの袖がまだ咲かず  
 三針目は助手が縫うてる手術台  
 編針の手を忙がせる秋の風  
 故郷は寄附を拒んでから行かず  
 柚子の香の中にひそんでいた故郷  
 梅桜植えて名所にするつもり  
 人違いだっただといわず道をき  
 ボンと肩たたいて見たら人違い  
 人違いは落ちて目になってからわ  
 気が落ち目になってからわ  
 もらい風呂くしやみしい帰って来

精神神経安定剤

アトラキシン

一般名  
メプロバメー

第一製薬  
東京日本橋

精神的緊張、不安を除去し、能率の向上に役立ち、就眠には自然の安眠をもたらす。筋肉緊張痙攣を除去し、肩こり、頭痛の特発性小発作等に有効。

(錠)(末)

川雑 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

酒屋から歳暮がとどくほどに飲み 雄々  
 宴會へ下地酒屋でつくつて 米 車楽齋  
 立飲みも来ねば食えぬと言う酒屋 青香  
 珍客へ妻は酒屋に裏を抜け 素瓢  
 居酒屋を通り過ぎてまた戻り 三舟  
 夕焼けの街を酒屋へとんで入り 枯石  
 奥さんの手からポーナス株となり 蛙眠子  
 息子より親が惚れてる嫁で無事 詩郎  
 親ほどに世間が惚れぬ娘に困り 一保  
 酒屋から五本も買った目出度い日 一机  
 何よりもまず財産にはれて嫁き ユリ子  
 一目惚れ六十年の不作なり 芋人  
 一目惚れ男の弱味へつけ込まれ 鶴丸

川雑 小松支部句会 (小松市)

伊藤茶仏報

出初式お酒もきいて 裸義 風  
 タツチアト勢い余つたオーバラン 吉枝  
 事の勢い社長を馬鹿と言つちまひ 千太郎  
 ラツシニアワ 荷物窓から席を占め 芳朗  
 箱一つ持ちつ持たれつ 駅に着き 多恵子  
 退院の荷物ごちやごちや増え居り やすえ  
 花の位置変えるに人を呼ぶ社長 一進  
 火が移るまでの寒さの早出番 城南  
 子の注射母が力んで我慢する きみ子  
 我慢する苦闘に耐える日が続く 光威智  
 罵倒せば静かに笑って受け流し 美和子  
 よう我慢したと悪智恵つけにくる 宗太郎  
 嫁という座に我慢することに慣れ るり葉  
 我慢もう出来ぬ女の肩が揺れ 茶仏

川雑 松江支部句会 (松江市)

梶谷冬生報

口八丁失礼したと言いませ 乱雪  
 足ぐせがどうであろうと男の子 三雷波

口八丁話題の外にいて孤独 妖人  
 足ぐせがマツランに似てお人好し 孤呂二  
 過去帳に五七五あり山川児 叮紅  
 過ぎ去った日の母の居る窓明り 章道  
 口八丁口下手の真実 与根一  
 旧性の夢くりかえしミシン踏む 祥月  
 夜番でもやってみようか不眠症 敬幸  
 極道のあくびが太い十二月 天知人  
 産声は極道息子と思われず 冬生

川雑 高知支部句会 (高知市)

大西迷窓報

病室へ又めぐり来る秋寂し 古城  
 療養は長らくせよと他人なり 蟠蛇  
 療養のあせり保険が切れかかり 温夫  
 商売があり晩酌の味もよし かつみ  
 商売を天職にして五十年 蘇木  
 養老院孤独同志でにぎやかに 利吉  
 何思ふ孤独今宵は橋に立ち 省吉  
 小山屋に独りなだれの音を聞く 句念坊  
 再婚へ耳かす孤独まだ若し 酔雀  
 過去のある女孤独の薄化粧 紀人  
 感傷の十九孤独の文字が好き 迷窓

杏林川柳会 (大阪市)

麻生路郎先生選

我橋一人歩きのでれくさき 豊子  
 我橋足とめて見る予告篇 小石  
 姉芸者昔が恋し 我橋 生々庵  
 物干のパンツも見えぬ 我橋 阿茶  
 ひろつてく恋もあるらし 我橋 小石  
 老らくも負けず手を組む 我橋 豊子  
 塗方に暮れる人も付すむ 我橋 珊枝郎  
 アリバイを考え考え 我橋 生々庵  
 地面掘けフランねつてる 我橋 珊枝郎  
 我橋舞妓に逢える夢もなし 同  
 夜ばかりは水も五色の 我橋 豊子  
 我橋眼に物云うてすれちがい 阿茶

我橋かき船だけが明治調 路文  
 みおつくしの鐘で人増す 我橋 同  
 我橋シネサイン見て待ち合せ 阿茶  
 気晴らしに来て兄嫁ともめて去に 同  
 気晴らしに来た山荘は淋しすぎ 同  
 サイレンに足場お猿のように降り 同  
 足場はずしてヒル燦然とそり立ち 同  
 足場から口笛が降る 良い女 小石  
 足場から落ちた途端に夢がさめ 同  
 足場スルリ映画はすべり落ち 同  
 仲間だけ知った足場を作るとき 珊枝郎  
 これしきの足場で女将よくねばり 生々庵  
 お上りへ足場良すぎてたかられる 一哲  
 教え子を足場にしても生き抜けず 同  
 足場より打って出た後足臍にし 同  
 大阪の食慾のそく 我橋 石南  
 大坂の食慾のそく 我橋 生々庵  
 気晴らしのやっぱり愚痴な酒となり 小石  
 気晴らしの酒やめるとは罪な医者 小石  
 家出して来たのも渡る 我橋 小石  
 路郎

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

赤帽が掛ければ荷物軽くみえ 南宗  
 赤帽から車掌に頼む客を連れ 武助  
 新婚へ赤帽三歩離れて歩き 圭水  
 金ないと思つたか赤帽寄つてこず 同  
 赤帽と呼び出す出来ぬ数に涙り 徹也  
 仕入日を赤帽ちゃん知つており 武助  
 赤帽は重そうに重そうに歩き 圭水  
 赤帽は万事OK一礼す 楽亭  
 赤帽も見えず艶と歩き出し 句念坊  
 赤帽はハラハラしたる駅を登つ 徹也  
 赤帽に頼んだ靴未だ見えぬ 句念坊  
 夜逃げとも知らず赤帽運ばされ 武助  
 夫婦ではないと赤帽見受けたり 雄声  
 赤帽を信用しない故郷の母 南宗  
 赤帽の代り彼女の荷物揚げ 南宗  
 発車寸前赤帽さつちり掲げてる 貴山

品質優良 洗ペンチ



立川ペン先株式会社

タチカワペン  
タチカワゼム  
タチカワ  
タチカワ  
タチカワ  
画紙

明和川柳研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

口敷も少なく忌中の家を辞し 球絵  
 音痴がモジモシカメヨでまよふ 英路  
 丹精のバラがつきつきと咲く忌中 参無子  
 忌を貼る路地は善意が満ちあふれ 六童子  
 逢曳の先生と知らず話しかけ 敬太  
 乱れ咲くタリヤ音痴の女に似 千尋  
 隣りの子瓜切る様に頼んどき 堰子  
 芸術を論ずる男の爪がのび 弦月  
 血の色に染めてひつかく爪をらん 満秋  
 瓜切ったあと独りもの所在なし 半歩  
 拾台詞もうよう云わぬ妻になり 見

(1)

爪はじきされてぶつ戻つて来  
拾台詞子供部屋から荒い音  
外人に道を聞かれた港街  
ささやかな木逢曳きを落付かせ  
赤い爪梯子を登る蟹を売り  
港町だらだら坂を歩かされた港  
引き潮が急に淋しくした港  
石黒の旦那に負けぬ音痴なり  
エンジンがだるそう真夏の港町  
爪の艶もう健康の自信持ち  
熱心なところが音痴笑われず  
逢曳きをした顔でなく茶漬食う  
拾台詞舞台は速き影絵なり  
卑下でない音痴実演して分り  
途中から音痴の芸に助けられ  
ランランランデイトの朝の歯をまかくす、む

家内中肥えて貯金のやせる秋  
良う肥えますます鼻が低くなる  
くちびる丈けの恋青春も足りず  
心境の変化に口紅塗って見る  
スゴロンド小銭がみんな出て仕舞い  
重役は重役という肥り様  
メリゴーランドママの視線のうちに回り  
遊園地子の乗物はみな回り  
竜という字を墨のありつたけ  
薄墨の矢印曲がり珠数を持ち  
懸崖の前で久しい人にあい  
寄らば切る子の唇はへしまがり  
自然美のおおぬ園のあやめ池  
唇といっしょにこめかみまで動き  
トンネルの天井しづくよく光り  
トンネルのある線やめてとおまわり  
トンネルを潜る音こたまする  
唇を突き出し引きつけ紅を塗る  
アベックも混って回る飛行塔す、む

帝化川柳会 (大阪市)

魔法瓶一つで足りない子 沢山 孝 夫  
子沢山毎日茶碗割れる音 義雄  
子沢山羊追うよなハイキング 九柴  
買物の山で計れる子 沢山 正一  
給料日帰った帰った子 沢山 柳影  
秋晴れへマツハが飛ばす子 二〇 大里  
伝言板に心残して 秋晴れる 葉乙女  
秋晴れへ内助の傘を持って出る 繁三  
番組の主導権をば子に取られ 好祐  
ムツリと水へらで 飲む故郷の酒 甲子朗  
ままごとへ嬖天下を再現し 甲子朗  
秋晴れの色が目に沁む里 柳影  
昆ちゃんが出て来て母の針を止め 白太  
子の寝顔もう青年期というす毛

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太郎

化粧して男をだますことおほえ  
未亡人たまの化粧をあやしまれ  
ワイシャツの口紅妻をヒスにさせ  
化粧せずそのままいとなじみ客  
年間え化粧十九の春という  
こんな日の残業にまで税があり  
残業にふと身もった妻のこと  
運一つにぎるチャンスの右左  
斜陽族昔の見栄を捨てられず  
これも見栄美人の妻をみせたがり  
見栄張ってもらった嫁をこきおろし  
神様が逢わしてくれたこのチャンス  
問題の女子どもを生むそな  
問題の女を思い切る気なり

羽曳野句会 (羽曳野市)

木原邦雄

さようなら花嫁衣裳の中で声  
さようなら又おいて言いたいケースの目  
やりくりがつかぬ間に又産れて来  
やりくりし追われし何時か厄が過ぎ  
晴衣裳借りものですと言わぬだけ  
子のふえる毎にやりくり上手になり  
やりくりも十年経てば堂に入り  
やりくりがつかぬ見越して餅をつき  
やりくりも楽しい想いをとらわね  
やりくりり盛装どこか抜けてお  
酌しながら苦面の辛さもちよつと良い  
女房見ろおれも歳暮を貰う地位  
お歳暮は送った方が喜ばれ  
歳暮みな断った師をなつかし  
小言云い小言云いお歳暮だけもらっ  
お歳暮をあごで受けてる応接間  
手洗いで歳暮の札をささやか  
さようならどうせ拾った恋だも  
さようならそれから女また話し

たけるべ川柳会 (岡山県)

野々口美舟

眼帯へ料理の色を言うてやり  
先代の友情二代目にも続き  
嫁が来て料理の味が二派になり  
まだ野心捨てず還暦派手にやり  
じらす予定に入れば娘は出かけ  
スポーツ欄読んで子供ともあ  
思出のカップ飾って母となり  
お隣が新婚だった旅の宿  
冷淡にされて魅力のある女  
被災地へ無情の雨が降り止まず  
回覧板料理ちらりと見て帰  
冷淡なわけをのぞいた日記帳  
速捕まで夫婦気どりでいたホテル  
湯の宿で逢つてはならぬ人に逢い  
記念碑が出来上つてから汚職が出  
白壁の土蔵が邪魔な葎干し  
友情の真偽零落して判り  
予定日へ無神論者も鈴をふり  
本人ははつたらかしの祝い酒  
友情の恋に変わった日を記念

船と料理と酒

アベノ橋地下映画食通街

千日前 大劇裏

大萬

梅里の店

★大万川柳(第百八回)を募る

兼題「ボケット」 路郎先生選

締切・二月十五日 句数五句以内

発表・二月廿一日 (店内掲示)

投句は 阿倍野区松崎町三丁目

一〇 大万川柳会宛

路郎  
メモ



雑誌が遅着、誤配、行方不明で大変ご迷惑をかけたことをお詫びする。再送、三送までして信用の保持に努めたがそれでは経済が持たぬ。中には一月経って着いたからと親切に返送して下さいました方があったが、長旅をして帰った雑誌では売物にはならない。松江市から年内に雑誌が届いたので時節柄驚いているというお頼りをいただいたが、目と鼻の間にある西宮市などは最も成績が悪かった。社から教町北にあるI氏から一月十二日になっても未着なので、どうなっているかという問合せがあった。I氏は現住所に十五年も在住しているからそこらごまさんも最もだと思ふ。こちらは一々カードとつきあわして送済済を確かめ得ても、とりあえず再送送をしたがこんなことを今後繰り返すようだったらこちらにも覚悟の問題だ。甚だしいのはH博士の場合だった。尋ねあたらないという付箋つきで戻った。H博士と云えば南朝の時代から続いている土地随一の豪家である。

市の医師会長でもある。長屋ばかり探がしたんと違うかと大笑であった。詳しく説明をして再送を頼っておいしたが、果して再送されたか。私は政治屋さんには信用しないが学校の先生や学生や、郵便の配達などには絶対に近い信用をして特別の敬意を表して来たが、こんな人達までが信用出来ないとなると世も末だと思ふ。どっかの気遣いがボタン一つ押して人頭を消す放れ業が近づいたのかも知れない。忘年句会の案内も、遅配や誤配や未着があつて、オレとこへなせ案内を寄こさぬとお叱りをうけたので、新春川柳大会の案内は他の方法によって、案内をしてより以上の成績をあげた。ヌトするの自由であろうが、自分で自分の首をしめるようなことになるかも知れない。まあポツポツおやんなさい。

私は今年には年賀はがきを一枚も出さなかった。コチラでもストをやった形だ。お蔭で暮の忙しい時に二、三日は助った。早稲田の先生からも忙しい時に郵便局へ手紙をかけるのはイヤだから、今後年賀状は出さぬから君の生年月日を知らして欲しい。誕生日にご挨拶をしたいからと親しみある書信をいただいた。そしてご自分の生年月日が記されてあつた。ところが畏友の生年月日が七月十日で私と同じだったので、大いに贅意を表して、七月十日にはお互いの健康を祝して乾盃しましょうと返信をして

ておいた。私の場合、どういう方法をとるかには目下考慮中である。全然出さないとすることは欠礼でもあるので何等かの方法でお返しはしたいと思つてゐる。しかし、私が年賀はがきを出さなかったのはストだけを問題にしてゐるのではない。私は年賀はがきを沢山いただいてありがたいたく感謝しているものであるが、年賀はがきというものに對して感激が薄れていくことも見のがせないのである。多くのはがきに「謹賀新年」だけでは、もつたという印象だけしかない。ジツとそれを眺めて、その人を回想するだけの時間がないことになる。印刷でいいから近時の動靜とか、感想とか記されてあれば、年賀はがきをもらつても、その人と語り合つてゐるような楽しさがあると思ふが、どんなものであろうか。孫が二人になつただけでも、今度停年退職したので、今後は趣味の世界に生きるつもりだなどの簡単なものでも書いて欲しいのだ。中には何の何某としてあるが一向記憶にない人の名もあつて失礼をする場合もあるので、特にこうした要望をする訳である。

★  
ペンの散歩

▼ことしの川柳まつりは5月なので正月そうそうから先生もお忙しくゆつくりされる日がなかつたよである。(川柳まつりの記事、32ページ参照) 一月十日に故日車

不朽洞  
会から

常任理事會——  
月例會は二十三日  
(土)午後七時か  
ら三休橋南詰西入  
る中島小兒科診療院楼上で開催。  
一、「川柳まつり」企画に關する  
件、二、短詩文學第四回作品展會  
場、其の他を審議九時散會し  
た。

☆新會員紹介

- ▼ 梶谷冬生(松江市) 正會員  
—— 緑之助氏推薦
- ▼ 小林孤呂二(松江市) 正會員  
—— 緑之助氏推薦
- ▼ 舟木与根一(松江市)  
—— 緑之助氏推薦
- ▼ 室田千尋(神戸市) 正會員  
—— 栗氏推薦
- ▼ 馬本 泰(西宮市) 正會員  
—— 栗氏推薦
- ▼ 林 夢虹(豊中市) 正會員  
—— 栗氏推薦

若本多久志著  
川柳親ところ子心

好評噴々  
150円  
送料24円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樹の中  
から親ところ子心を詠った秀句を多年に亘  
って根気よく拾い集めたのが本書である。  
登載された柳人三百余名、集句二千余は親  
と子の愛情が如何に深いものであるかを知  
ることの出来る、実に有義な書である。  
浅春の  
棚に冊  
本一冊  
のゼヒ  
ること  
ること  
ること  
ること

川柳雑誌社  
大阪府東區西五ノ二五  
阪西口大坂七五〇五〇

# 食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌  
2月号発売中 120円(〒12円)

特集  
かまぼこへの注文帳  
ビールのリベート問題  
変貌する食品工業

液体香辛料について  
乳化安定剤について  
座談会 香料座談会

◇海外情報 ◇特許告知板

〔展望台〕主食・糧食・菓子・酒類・香料等

大阪北区5-5-4 食品と科学社 電話3415231 大阪6702番

## 新小柳海産

麻生路郎著

好評噴々

川柳の味い方・五百数十句

(毎日新聞評)  
麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にして他の柳誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとした

ものである。  
句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円  
送料三三〇円  
B6版  
二五〇余頁

発行所  
川柳雑誌社

大阪市住吉局区西代西五丁目二番地  
電話 大阪 六〇八一  
阪神口津大阪七五〇五〇



お買物は...  
清く  
明るく  
美しい



大阪梅田・水端定休  
阪神  
電大代表(36)1201

スマートな  
着心地のよい

O.S.K.の  
レイキード

大坂商店  
大阪市東区東津田一丁目二番地  
電話 東(94)1745-5563番

寒中御見舞

麻生路郎

printed in Japan

発行所  
川柳雑誌社

電話 大阪 六〇八一  
阪神口津大阪七五〇五〇

B列5号 毎月一回一日発行  
川柳雑誌 第三十五年 第二一号  
定価 七〇円 (送料四円)  
半カ年 四四四円  
一カ年 八四〇円  
昭和三十五年一月廿五日印刷  
昭和三十五年二月一日発行  
大阪市住吉局区西代西五丁目二番地  
編集兼発行人 麻生路郎  
行印刷人 麻生幸二郎

(禁転載)

募 集

課題吟募集

- 女将 (十句以内) 大西八歩選
- 看護婦 (十句以内) 八木摩太郎選
- 女医 (十句以内) 中島小石選
- 下女 (十句以内) 友淵貴山選
- 少女 (十句以内) 弘津柳慶選
- ニコヨン (十句以内) 吉田圭井堂選

月号募集

- 近作柳樽 (雑詩十句以内) 麻生路郎選
- 川柳塔 (雑詩十句以内) 北川春巢選
- 文章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選

投稿規定

投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記すること。  
「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。  
「課題吟」は誰でも投稿が出来る。  
「川柳塔」の投稿は不朽洞会員に限る。

疲れをとり  
抵抗力の強い  
からだをつくる  
高単位総合ビタミン・ミネラル剤

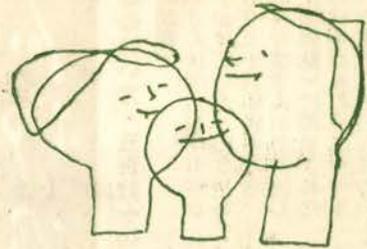
**ポポン-S**

20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円



塩野義製薬株式会社

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL 64551-2

麻生路郎先生著  
川柳とは何か 送価 二五〇円 三三〇円

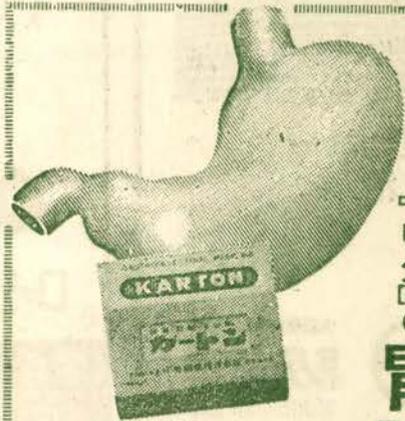
—川柳の作り方と味い方—

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたものもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかんにして發生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

**至文堂**

東京都新宿区払方町27 振替東京28507



効きめの速い：

『中外』の胃腸薬

カートンは胃腸を丈夫にし食欲をたかめ消化をよくする新しい総合胃腸薬です。胃痛・胸やけ・むかつき等一服のカートンで爽快になります（バス入れにも入る特殊セロ包装も好評です）

**カートン** (散薬)

(15包 ¥100. 24包 ¥150. 54包 ¥300)



グロンサン製造発売元 東京都日本橋本町 中外製薬株式会社

中外製薬

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可  
昭和二十五年二月一日発行 (毎月一回一日発行)

編集 兼 発行印刷人

麻生路郎 発行所

川柳雑誌社

大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地 電話大阪六〇八一

社務口座六四七五〇五〇番

定価七十円 (送料別)